

第十六の出現

(三月四日 水曜日)

三月四日は、ベルナデッタが出現の姫君と約束した十五日間の、最終の日であつたから、今日こそ姫君が名乗り給ふであらう、そして集つた人々にも明かに現れ給ふであらうし、司祭から求められたばらの花も咲くであらうと、誰となく言ひふらしたので、数日前から待ちかまへてゐた見物人は、二萬人にも達したかと思はれる程でした。

町長、助役、警部等は、知事の訓令によつて、その官職の徽章をつけて、一生懸命で巡視してゐました。それ等は警部ヂャコメが縣知事に送つた報告書に、その大略が盡されてあります。即ち、

「今朝六時半頃、見物人は四方から集つて、實に驚くべき多数に達した。速ひにとらはれた少女は、七時に來るはずであつたのに、その時刻になつてもまだ見えなかつたので、人々は一時動揺したが、七時十五分になると、彼女の姿が見えたから、さわぎは俄かに静まつた。

少女は洞穴の前に跪いて、蠟燭をともして、十字架の印をして靜かに祈り始めたが、暫くして顔は眞白に變り、兩方のひとみを洞穴の上の、細長い入口の正面に据ゑて、ロザリオを繰つて、時々その誦を止め、或は微笑み、或は頭を垂れてえしやくした。かうして凡そ三十分もたつと、立つて蠟燭を持つて、跪いてゐた所から洞穴の入口まで進んで、しばらく立つたまゝ、洞穴の奥に目を注いでをつたが、微笑んではえしやくし、えしやくしては微笑むこと二回ばかりして、前に跪いてをつた所に戻つて、跪いてロザリオの誦をして、また立つて洞穴の入口に進んで、立ちながらえしやくして元の座に歸り、暫く祈つて十字架の印をして、蠟燭の火を消し無言のまゝ歸つた。その時誰一人として問ふものはなかつたが、見物人は欺かれたと云つて、失望の様子であつた。

けれども不可解いことには、欺かれたと云ひながらも、澤山の人達が彼女の後をぞく／＼と追つた。そしてベルナデッタの家を十重二十重に圍んだ。しかし何等の混雜もなく順序が保たれ、けが人などは一人もなかつた。この點は、甚だ本官の意外に思ふ所である。出現者はベルナデッタに、何事かを語つたやうなれど、ベルナデッタは、一切これを他に語らないとのことである。」

この報告書に、見物人は欺かれたと云つて、失望の様子であるとあるのは、別に欺いた者があつたのでないことは云ふまでもありません。この日の十五日間の最終日であれば、何か重大なことでもあらうかと、ある人達の想像に出た風説が、見物人の頭に入つて、それを期待してゐた爲でした。

多くの見物人が、ベルナデッタの住家に押しかけた時、氣のきいたマルチン・ダルベスといふ人は、人々に満足させようと思つて、假に入口と出口とを作つて、順々に人々を内に入れさせました。人々はベルナデッタに握手を求め、

或は接吻などして靜かに立ち去りました。こんなことで、ベルナデッタは二時間以上も費しました。この日の夕方、或る知己の者がベルナデッタに向つて、

「今日はさぞ疲れたでせう」と云ひますと、彼女は、

「ほんたうに疲れました。あんなに握手されたり、接吻されたりしましたので……」

と笑ひながら答へました。

憲兵中尉ダングラは、この大勢の見物人が極めて靜かであつたことを語つて、「わしは、部下の憲兵を彼方此方に配置したが、何れも空しく立番したばかりで、何事もなかつた。たゞ、ベルナデッタが家へ歸る時、あとについて行つた多くの者は、記念にしようといつて、ベルナデッタの家の破戸や、柱や窓などを削り取つて去らうとしたから、部下の憲兵が止めただけであつた。それも憲兵が注意すると、見物人は、すぐその行爲がおだやかでないことに氣がつい

て、早速やめたのである。」

尙ベルナデツタの従姉ジャヌ・ブイーデルの話を書くことにします。

「今日は十五日間の終りにあたる日であるから、ぜひベルナデツタと洞穴に一詣に行つて、出現の時には、その側でよく見たいと思ひましたので、朝早くから彼女の家に参りましたが、その時はもう大勢の人達が家のまはりに集つて、がや／＼騒いでをりました。役場の人達や警察の人達は、あちこちに馳せ廻つていろ／＼と指圖してゐるやうでした。

家の内では伯父や伯母が（ベルナデツタの両親）今日はどうして過さうかと、生活上について心配してゐる様子でしたが、五時頃になると、ボルドー市から三人の醫學博士が来て、ベルナデツタを診察して「何も病氣はない」と云つて直ぐ歸つたので、六時半に家を出て御堂に行つてミサ聖祭にあづかつてから出ると、そこにたゞすんでゐた人達は「ベルナデツタが来た、ベルナデツタが来た」

と叫んだので、四方から大勢の人達が集つて来て、ベルナデツタを見ようとして、私達の前後を押し合ひましたから、私達は退くことも進むことも出来なくなりました。すると一人の憲兵が劍を抜いて、えらい人を護衛するやうに先に立つてくれたので、やつと進むことが出来ました。

ベルナデツタは、かういふ嚴しい護衛を受けても、少しもたかぶる様子もなく、謙遜の態度で歩きました。それは丁度バルトレスで羊を追ひながら山に行く時と似てゐました。

途中、一人の男が十位の少女をベルナデツタの前に連れてきて「この娘は盲目ですが、どうぞこの娘のために祈つて下さい」と云ひました。ベルナデツタはその娘を見て「おゝ」と云ひながら、両手で抱いて接吻して、その父親に向つて「私も祈りますけれど、あなたも熱心に祈りなさい。そして洞穴の泉の水で眼をお洗ひなさるとよろしうございます。」と答へて、二三歩進むと、又女中

に病氣の男の兒を負はせた一人の貴婦人が、蠟燭を差出しながら「どうぞ現れなされる姫君がこの子をお憐み下さるやうに、この蠟燭を献げて下さい」と願つたので、ベルナデッタは「私はお子様のために祈りませう。蠟燭は御自分で、洞穴になり、御堂になりと献げなされる方がよろしうございませう」と云ひながら進んで洞穴近くに参りますと、人々のためにわけ隔てられて、私はベルナデッタを見失ひました。でも親切なベルナデッタは、心配してしきりに私を深してくれたので、チャコメ警部と一人の憲兵が私の手を取つて、大勢の中をかきわけて、ベルナデッタの側まで連れて行つてくれました。

洞穴に着きますと、ベルナデッタは跪いて祈りを始めましたが、間もなく顔がきれいに眞白に變つたので、私は姫君が現れ給うたものと思つて、洞穴の入口の方を一心に見つめました。けれども、たうとう何も認めませんでした。で、今度はベルナデッタの顔や、姿や、そぶりに注意して見てをりました。彼

女はロザリオを誦へる間幾度となく微笑んだり、うなづいたり、えしやくしたりしました。この日は、ロザリオを三串誦へたやうでしたが、最初の一串には歡ばしげな顔をして、中頃には悲しさうにしてゐましたが、最後には楽しいやうな様子を見せました。

ベルナデッタと洞穴から一諸に戻る時は、大勢の人達は前後について來ました。そして家の周圍に集つて、各自ロザリオを取出して、記念のために手を觸れてくれるやうにベルナデッタに頼みますと、ベルナデッタは微笑みながら「厭なこと……およしなさい、私が手で觸つたからつて、どうにもなりません」と云つて、一度はことほりましたが、暫くして人々の心を察したのでせう、「よろしうございます、皆一諸にお出しなさい」と云つて、ロザリオを手でもんで返しました。

私も三つのロザリオを出して、「私にも……と云つて願ふと、暫く首を

傾けておりましたが、「お出しなさい、私のロザリオと擦合せて上げませう」と云つて自分のものともみ合はせて私に返して「これは姫君の前で使つたロザリオに觸れたのですから、大切にお持ちなさいよ。」と云はれました。

午後三時頃、今朝来た三人の博士が再び来て、ベルナデツタを診察べて身體にも精神にも異状はないと云つて歸りました。博士が来る前に、ベルナデツタは御堂に行つて、ペイラマル司祭とこんな問答をしたさうです。

「姫君が現れ給うた時、あなたの仰せられた通り、ばらの花を咲かせることを申上げましたけれど、姫君はたゞ微笑まれるばかりでありました。

「さうか、そんなら、わしはその婦人の希望に應ずることは出来ない。婦人は一體誰であるか今一度訊ねてくれ。もし聖母マリアに在すならば、云ふまでもなく力の及ぶ限りつくしたい。そしてその婦人は、これからお前に洞穴へ来いと云つたのか。」

「いゝえ、何んとも……」

「その婦人は、また現れるとは云はないのだね。」

「いゝえ、さうは仰しやいまん。」

この日ベルナデツタは、洞穴から歸らうとする人達に「今日は最終の日でありましたが、姫君との別れはどうであつたか。」

と問はれて、

「別段のこともなく、いつもの通り微笑みながら入らせ給うた。今後また現れないとも何とも仰せられずに……」と答へたので、人々は重ねて、

「約束の十五日間は終つたのだから、もうお前は洞穴に行かないでせうね。」と云つて訊きますと、ベルナデツタは答へて云ひました。

「いゝえ、私は何時でも洞穴に参るつもりですが、姫君がこれからも、現れ給ふかどうかは判りません。」

その後の一般信仰とベルナデッタ

無宗教派の新聞は、三月四日即ち姫君と約束した最終の日が過ぎると次のやうな記事を出してベルナデッタを悪評したのでした。

「彼の洞穴の狂言は、世の物笑ひの中にいよいよ終局を告げた。その信仰家と云はれる人々も、やうやく迷ひから覺めて、今は彼處に行くのを恥る程になつたので、元のやうに淋しくなつてしまつた。彼の迷ひの少女は人々の信用を全く失つて、もう一人も顧みる者もなく、空しく父の家にかくれてゐる。實に彼女ば、巫女の果のはかなさを悲しむ身とはなつたのである。」

彼等ばかり罵つたけれども、事實は全くそれに反してゐました。成程最終日から二三日の間、天氣が悪かつた爲に、参詣人もあまり多くはなかつたけれど、數日の後には、朝夕の別なく参詣する人が多くありました。たゞこれまでのや

うに時刻が定まつてゐないので、一時に多數混雑することはありませんでした。日曜日などは、特に田舎の百姓や牧者の休み日であるから、遠い路をも厭はず参詣に来る者が多くありました。

又姫君の慈愛によつて、心のくされが癒された者や、身體の病氣が癒された者は、お禮のためと云つて、金の小さい十字架と鎖を献げたり、又は洞穴の中に小さい祭壇を作つて聖母の御像を安置したり、或は宗教的な章牌などを供へて晝夜の別なく幾百の蠟燭をともし、聖母に對するさんび歌のひゞきや、とりなしを求める所の聲は絶え間なく、まるで聖堂のやうな有様でした。

姫君が御希望なされた聖堂建設のことは、今はもう一般の問題となりました。その費用にと云つて、参詣者は皆こゝに金錢を寄附したので、幾千圓といふ金は一箇の箱からあふれてその邊に散つてゐました。けれどもその金は、誰も保管しないのでそのままにされてあつても、不思議に一錢も盗まれないのでした。

そして出現があつてから、縣内に一人も重犯者も出ないことでした。

ベルナデツタは相變らず貧しい生活をつゞけておりました。そしてこれまでの身に餘る光榮を思出しては、心ひそかに微笑んでおりました。そしてやはり他の子供と少しも變ることなく學校に行つたり、また遊びたはむれたりして無邪氣に暮しておりました。たゞ聖堂に入つて祈する時だけは、洞穴に於て姫君に對してゐる時のやうな面影が靜かに現れ、まるで天使かと思はれる程でした。

彼女はまた初聖體を受けてゐなかつたので、その用意のために教會に行つて公教要理を學んだが、他の子供等よりも賢くはありませんでした。

ベルナデツタはその後も姫君のことを忘れかねて、學校から歸れば、度々友達と離れて洞穴へ行つて、跪いて謙遜の心を以て土に接吻して、丁度姫君が現れ給うた時のやうに、熱心にロザリオを誦へておりました。

官吏の干渉

官吏がマツサビエルの事件に干渉して、しきりに壓迫けようと努めたのは、自然を超えた出來事（出来事）の存在を否（いな）み、愚民を迷はすものに過ぎないものとし、たゞこれを鎮壓めようとばかり考へてゐたからです。天主に反抗する惡魔はこのやうな人の心の缺點につけ入り、洞穴の出來事によつて世間の人の信仰が向上されていくのを嫉んで、厭はしいいろ／＼な所業をしてしきりに人の心を惑はせたから、官吏等は自分の偏見ばかり主張して、かなり長い時日の中に、この事件が續いていつたにも拘らず、誰一人として實際に視察した者がなく、盛んに干渉の手を振つてゐたのでした。彼等は世間の平和を保つため、又迷信におち入らないやうにと、いろ／＼干渉したのであつたらうけれども、事實は却つていつも反對の結果になりました。つまり一般人民の信仰を害し世間の平和を

亂したばかりでした。

無宗教者の反対はたゞ空しい論ばかりでありまして、彼等は確かな證據があると共に煙のやうに消え失せましたが、官吏の反対はその権能によつてすることで、そのあともなか／＼消え去ることがないので、事實の存在を證す材料としては、殊に重要なものと云はねばなりません。故にルルドの事件を考證るにも官吏の干渉は有力な證據材料となることなので、重ねてその大要を示しませう。

二月二十一日、検事チュートルと警部チヤコメとはベルナデツタを招いて、二度と洞穴に行かぬやうに諭して、その約束をするやうに威喝したけれども、ベルナデツタは遂に従はないので、警部はその父を戒めて、父から禁じさせたけれども、ベルナデツタはなほ偉大な力に選ばれて、父の禁止もつひに守られないことになりました。そこで警部は、スピルス父子に欺かれたと云つて憤つ

て、様々に邪推して探偵をさせスピルス親子の様子を探らせました。その上金をもつてその慾情によつて誘はうとして、いろ／＼と手段をつくしたけれど、結果は空しく、ベルナデツタの正直と、スピルス家族の清いことを證明すにすぎなかつた爲、敏い警部チヤコメは、自分の手腕と威力とでは、とても少女の堅固い心を動かすことが出来ないのを悟つて、次の報告をして、遂に干渉をやめたのでした。

「マツサピエルの洞穴の事件にかゝはる少女の話は、迷ひに過ぎないものとするも、これを信ずる多くの参詣者の行爲は、すでに宗教的であると思ふ。」

町長ラカデも亦、同じ意味の報告書を送り、高等小學校長クラレンスも、これを眞實に報告するのは自分の責任であると云つて、洞穴で見た所、感じた所を詳しく書いて知事に送りました。知事はこれ等の報告書を受けて、それを役所の役人達に見せて、笑草の種にしたといふことです。

このやうに知事はもとより洞穴事件をあまり気にしてゐません様子でしたが、ルルド町にゐる官吏たちは、参詣する者が日毎に加はつてくるのを見て、非常に心配して、それを止める方法を實行したけれども、その効がなかつたので、出来事一切を知事に報告して指圖を求めました。知事は洞穴の内外をくはしく調査べて、混雜のために参詣者に怪我などのないやうに注意し、その他よろしく取締るやうに命令しました。それでルルド町長以下の官吏は、十五日の間、殊に最終の日には朝早くから洞穴に詰めかけて、熱心に調査たり取締に努めたりしたが、結果はます／＼ベルナデツタが正直で信仰が堅固であることを證明するばかりでした。

この官吏の干渉は聖母マリアがその現れを明かにする證據として許し給うた御計でありませう。何故かと申しますと、洞穴の内外を調査れば調べる程、嚴重にすればする程、いつはりやだまし事でないことが明かになり、壓迫が激し

ければそれだけ、強い反證が見出されるといつた有様だつたからです。

その後知事等は、ルルドの事件が自然に消えてしまつたものと思ひ、少しも心に留めなかつたが、三月十九日再び警部チヤコメの書面を受けて、又々不安に思ひました。その書面は次のやうなものでした。

「迷ひをいだく少女の一件につき、残念ながら又御耳に入れなければなりません。三月四日から数日の間は、参詣の人も少かつたが、これは全く天候が悪かつた爲で、参詣の思を断つたのではない。それ故その後は、これまでの如く一定の時刻にこそ集まらねど、婦人子供は云ふに及ばず職工、農夫、田舎の紳士に至るまで、朝から夜まで絶えず参詣してゐる。日曜日の十四日朝は蠟燭二本ともしてあつたが、月曜日には三本となり、火曜日には五本となり、水曜日は更に宗教畫を以て飾り、晝夜多くのローソクをともし、参詣人は日に増して殖え來り、それらの多くは跪いて祈り、泉の水を飲まぬ者なく、且つ皆ピン

などに詰めて持ち歸るのである。」

續いて三月二十四日、チャコメ警部は次の報告書を知事に送りました。

「マツサビエル洞穴の近状は、その後参詣人がますます多く、あだかも聖堂の如くになつた。十字架の繪を飾り、聖母マリアの像を置き造花又は草花などを供へ、さいせん函まで設けてある。昨夜の如きは六百人以上の人々行列をなし、聖母マリアの像を運び行きて安置した。これが爲にタルブ市とポー市との馬車屋は特に馬車を仕立て、参詣の人々を運んだ。人々は夜の十時頃まで洞穴の前に跪いて祈つたが、不思議にも些かも混雑なく皆静かであつた。彼の少女は、これ等参詣者と何の關係もない者の如くである。これは三月四日からの有様でその間に例の出現なるものは一回もなかつたやうである。」

この警部の二回の報告によつても無宗教新聞が「物笑ひのうちに終つた」などと云つたのは、つくりごとであることが明瞭であります。

第十七の出現

(三月二十五日 木曜日)

三月四日から三週間のうち、姫君の出現はなかつたが、多くの人達は、これで洞穴事件は結末をつげたものとは思つてゐませんでした。

三月二十五日は、聖母マリアが大天使ガブリエルから、救世主クリストの母となるやうに告げられた大祝日であるから、ルルド町と附近の人々は、明日こそ洞穴に参詣して、聖母の光榮を祝はうといふ心が互に一致して、その日には多数の人々が四方から洞穴の前に集りました。

殊に貞潔を重んずる純真い婦人達は熱ゆるやうな憧憬を以て参詣しました。今日はずきつとあそこに何かあらう。御告の祝日だから、出現の姫君がお名を明し給ふかも知れないと、互に心のうちに思ひうかべたのでした。かうした純真い婦人等に、皆一樣な考への起つたといふのは、自然のことゝは思はれませんが。

殊にベルナデツタは、この心が一層強くて、胸が烈しくおどるのを覺えたのでした。

三月二十四日の夕方、貧しくとも睦じいスピルスの一家は楽しい團樂にへだてなく語り合つてゐましたが、ベルナデツタの胸に「明日洞穴に來なさい」といふ聲がひびいたので、彼女はそれを兩親に告げ、明日洞穴に行く許を得ました。それでこの夜は、またあのなつかしい姉君にお目にかゝることが出來ると思へば、嬉しくて、ろくに眠らないでロザリオを靜かに誦へてゐました。

二十五日の朝早く起きたベルナデツタは、喘息の苦しさも忘れて急いで洞穴に來ましたが、後で彼女の語る所によりますと、彼女が洞穴に着いた時は、すでに細長い洞口は光り輝いて、姉君は笑を含んで佇みながら、丁度慈愛深い母が、子を眺めてゐるやうに、あふれるばかりの愛をこめて、そこに集つてゐる人々をみそなはして、早くもベルナデツタに目を移して、喜ばしげに迎へ給う

たといふことでした。

その日の午後、ベルナデツタはエストラド氏に次のやうに物語りました。

「私は姉君の前に跪いて、おくれたお詫を申上げましたら姉君はいつものやうに優しく「詫びするまでには及びません」と、お示しなさいました。私は堪へられない程、深く姉君を敬ひ愛してをりますから、「今日重ねてお目にかゝることが出來たのは、この上ない喜びでございます」と申上げました。それからロザリオの祈を誦へ始めましたが、誦へてゐる間に、しきりに姉君の御名をお問ひ申したい心が起つたのですが、それまで幾度伺つてもお答へのなかつたのを、今また重ねてお尋ね申したら、さぞうるさいと思召すであらうと思つたので、むりに心に押へてをりましたけれど、何故かどうしても止められなくなつてきたので、つひ思はず「あなた様のお名前をお聞き致したう存じます」と日走つてしまひました。すると姉君は、前々と同じやうに、頭をさげて微笑まれ

るばかりで、何とも申されませんでした。ますますお問ひ申したい念がしてききましたので、「何卒特別のおんあはれみをもつて、お聞かせ下さい」と申上げました。姫君はやはり微笑まれるばかりでしたから、私はもう堪へられなくなりまして、「私のやうな賤しい者が、御名をお伺ひ申すのは、ほんたうにおそれ多いことではありませんけれど、特別の御慈悲をもつてどうぞお聞かせ下さいますやうお願い申上ます」と無理にお願ひいたしました。

と云ひながら、彼女は聲を震はせ、涙ぐんで語りつゞけました。

「姫君はその時、洞穴のばらの上にお立ちなされて、御胸のところ合せた両手を静かにお離し遊ばすと、おごそかに、しかも謙遜なされ、天主に感謝するやうに天を仰いで、御聲をふるはせ給ひ、

Je suis l'immaculée Conception (われは濁なき被孕なり) と申されて、再び両手を合せなされたのです。」

エストラド氏とその妹とは、ベルナデッタが姫君の言葉をくり返しながら、姫君に真似て合せた両手を離して天を仰ぎ、更に手を合せた様子の優れて美しいのを見て、非常に感嘆して、全くベルナデッタでなくて、聖母マリアを仰ぎ見るやうな心地がしたと申しました。そして又、天の元后と語る顔容の美しい彼女に接して、見れば見る程慕はしく、又そのさわやかな話を聞けば聞く程なつかしく、ベルナデッタの訪れは天使の訪れかと思はれて嬉しい思ひがしたと云つたさうであります。

この日姫君は、ベルナデッタに告げるに彼女の用ひる俗語をもつて仰せられたのでありますけれど、彼女はこの言葉を始めて聞いたのであるため、發音が悪くて、コンセプション(被孕)をコンシエブシウと云つたので、エストラド兄妹は、母が小兒に言語の發音を教へるやうに正すと、ベルナデッタは無邪氣な調子で、

「お嬢様、インマキュレ・コンセプションで何のこと……」
と首を傾けて訊ねたが、エストラド氏はその質問を聞いて、彼女が決して偽
を云ふのでないことを確めました。

さて、ベルナデッタは、まだ公教要理をくはしく知らなかつたけれど、前にも云つた通り、「汚なくして被孕り給ひし聖マリア、我等のために祈り給へ」といふ祈をよく覚えて、救世主クリストの母となられた聖マリアが、源罪の汚なく被孕り給うた者であることはすでに覚えておりましたから、姫君の告げ給うた言葉の意味さへ解れば、その聖母に在ますことを悟ることが出来たであらうが、その言葉の意味が解らないのでした。

これより先、ベルナデッタは、姫君のお言葉の意味が何のことであるか解らなかつたけれど、司祭に告げたならば、司祭はその意味を悟つて、聖堂を建てることにもならうかと思つて、姫君が消えさせ給ふと、すぐにお言葉を忘れな

いやうに口の中でくり返しながら司祭の所へ行きました。ベイラマル師は、この悦ばしい音づれを聞いても、あまり心を動かさないうで、

「そんなら、ロランスの司教に告げよう。」
と答へたばかりでした。

この日、人々は皆ベルナデッタに目を注いで、今日もお告はなからうかと、彼女の祈の終るのを、待つてゐると、やがてベルナデッタは出現者との對話が終つたとみえて、立つて歸らうとするから、人々は我先にと近寄つて、今日姫君は何と仰せられたかと訊きますと、

「我は瀆なき被孕なり」と答へました。

それを聞いた人々は非常に驚いて、すぐそこに跪いて感謝を献げました。そして「原罪なき聖母」とさんびして、洞穴の方に進み或は岩に接吻し、或は細長い入口から垂れてゐるばらの枝に接吻し、或は恭しく泉の水を飲む者な

どもありました。そして誰が傳へるともなく忽ち四方に廣まつて、洞穴の前と岩の上の川の彼方とに集つてゐた人達は聲を合せて、

「原罪なくして被孕り給ひし聖マリア、我等のために祈り給へ」と、盛に唱へ出しました。

この喜ばしい音信は、間もなくルルドの町中に傳つたので、人々は皆戶外に飛出して、自分の家に慶事でもあつたやうに、出現の姫君は原罪なき聖母であると云つて、互に手を握りながら祝し合つて喜びました。別でもこの音信をよろこばしく聞いたのは、貧しいスピルスの一家でした。ベルナデッタの両親は、出現以來心を傷めることばかり多く、初めは病にかゝつたのではないかと思ひ、次には悪魔につかれたのであらうかと心配し、或時は罪人のやうに警察署に呼び出され、或は探偵され、或は悪さまに種々なうはさを立てられ、始ど云ひやうのない迷惑を受け、堪へられない程の苦痛をなめたのでした。けれども今は

天の元后である聖マリアが、賤しい我が子に現れ給うたのであると聞いて、前に受けた苦痛も迷惑もうち忘れて、涙を流して喜び、感謝したのでした。

この日集つた人達が、ベルナデッタから「我は瀆なき被孕なり」といふ言葉を聞くと、すぐにそこに跪いて感謝を捧げ「原罪なき聖母」をさんびしたのは、出現の姫君が救世主クリストの御母聖マリアであることを知つたからでした。

その時から三年前に、公教會の首であるローマ教皇ピオ第九世は、世界の信者の希望を全うして、原罪があるといふことさへ承知しない不信仰の人々に向つて、原罪のあることと、聖母マリアは獨り原罪なく母の胎内に孕り給うたことを教へ、信仰箇條に加へなされたので、全世界の信者のよろこびは云ふまでもなく、殊更信仰箇條にされたから信するといふよりは、むしろ代々それを信じられた故、信仰箇條に定められたのであれば、今マツサビエルの洞穴に現れ

た御方は、御自身で、原罪なく孕り給うたことを申されたと聞いて、誰一人として聖母マリアであることを疑ふ者はありませんでした。

聖母が御自分の名を告げられず、又クリストの母であると仰しやらずに、單に原罪なく孕つた者と申されたのは、天より頂いたすべての恵のうちに、原罪を逃れたこと、即ち片時も天主より愛されることがないのを最も喜び、感謝に堪へないことを現して、人にとつて罪にけがれないことは、何よりも大事なことであることを明かに示し給ふのでした。

又聖母は、ローマ教皇が三年前教へられた通り、凡ての人に原罪のあること、御自分は特別にこれを逃れたことを直接に確かに證しなされた上、教皇が信者に向つて教の簡條を決める権利があること、教理について無謬い特別の權をもつてゐることを、間接に保證し給うたに違ひがありません。これは原罪のないといふ定理を固く信じさせたばかりでなく、その信仰から出る喜びを一般

に増し、又原罪のない聖母が、御慈悲深く在らせられることをことさらに現して、これに對する信頼をますます著しく引起されたのであります。



第十八の出現

(四月七日 水曜日)

ベルナデツタは、その頃まで初聖體を受けてゐないので、クリストの御復活を祝ふ日がきて、他の信者達のやうに聖體拜領の楽しみはなかつたから、聖母はこれを憐み給うてか、四月七日にも出現なされて、彼女の心を慰めなされました。

四月七日は、この年の復活祭から二日目で、この日醫學博士ドズス氏は、洞穴で親しく見た所を物語りました。

「この日ベルナデツタは、これまでにないなつかしさと、慕はしさの念が強かつたものとみえて、出現者に向つて、暫くうつとりと見とれてをつたが、彼女は左の手にロザリオを持ち、右の手には二尺程もある蠟燭を持ち、まるで天使かと思はれる程の崇高さをもつて、熱心にロザリオの祈を誦へてゐた。

やがて彼女はいつものやうに跪いてゐる所から、にちつて洞穴に進んだが、突然途中で止まつた。そして蠟燭を持つてゐる手と、左の手とを知らず知らず胸の前に持つてきたので、ローソクの火は左手の指の間を通つて、風のために一層燃え上つたけれど、ベルナデツタは平氣で、少しも熱さを感じないやうであつた。

わしはこれを見て、非常に驚きながらも、時計を出して時間を測つたが十五分餘りも火が燃えてゐた。彼女はそれから洞穴の前に登つて、始めて兩手を元のやうに離した。

かやうにして彼女は、祈も終り平生に復つて、家へ歸らうとしたので、わしは焔の當つた手の指を、くはしく調べて見たが、わづかの火傷のあとさへなかつた。そこで更にらふそくに火をともし、試みに彼女の左の手に持つて行くと、彼女は驚いて「あゝ熱い」とあわてゝ手を引いて「あなたは人の手を焼かうと

なさるんですか」と叫んだ。

わしはこの不思議な現象を、充分に注意して見たが、これを見たものはわしばかりでなく、側で多くの人たちが見たのだから、わしは見たそのまゝを僅かにつまんで語るだけである。」

こんな不思議は、少くとも二回は確にあつたやうで、かつてエストラト嬢も見たことがあると云つてゐました。嬢は、四月七日ドズス博士の見た時は、洞穴に行つてゐなかつたので、見ることは出来なかつたが、それより前の出現中に、ベルナデツタが点火してゐるローソクの焰に、手を差しつけてゐるのを見て、

「あゝ、ベルナデツタの手が焼ける。誰か早くらふそくの火を取りなさい。」

と、驚いて叫んだけれど、見物人で誰もそれに應ずる者はありませんでした。然し後でベルナデツタの手を調べたが、火傷のあとがないばかりか油煙のあと

もなかつたさうです。

序に、ベルナデツタの點したこの大きなローソクは、傍にをつた参詣人から受けたもので、彼女が自分で持つて來たのではないのでした。貧乏な彼女はそれを買ふことが出来ないのでありました。



惡魔の手段

五月と云へば聖母の月で、聖母が現れ給うた洞穴へ参詣する人達は益々多くなつてきました。

人の幸福を妬んで妨げたり、人を罪におとし入れようとして謀つたりする悪魔は、この有様を見て色々の手段を以てそれに妨げをしたのでした。

悪魔が最初洞穴に現れたのは二月十九日のことであつて、この日ベルナデッタは、うつとりと姫君の御姿を眺めてゐる間に、後の方のガブ川の水の中から「逃げろ逃げろ」といふ叫聲を聞いたので、怖れて慄えながら姫君に救ひを願ひますと、姫君は眉をひそめて、きつと彼方を睨みなされると、その聲は忽ち消えるやうに止んだと云ふことです。

その當時ベルナデッタは、その事を見物の人々に語つたけれど、誰も信ずる

者はありませんでした。それは何かの聞き誤りか、心の迷ひであらうと云つて、取合ふ者はありませんでした。後になつて一人ばかりでなく聞いた者があつたのを見れば、ベルナデッタの誤りでないことがわかります。

その頃ルルドの町端に住んでゐる、マリアといふ一人の娘は、宗教に非常に熱心でした。或日洞穴に参詣して、歸らうとした時、不思議なことに、岩の底から面白い音楽が聞えてきたのでした。娘はうつとりして、その美妙的な音楽にしばらくの間心を奪はれてゐるのでした。

翌日、娘は今日もあのやうな美しい音楽を聞かうと思つて、洞穴に参詣して祈を始めると、またもそれが聞えてきました。はつと思つて、耳を澄ませば益益美妙に聞えてきて身も心もとろけるやうでした。暫く我を忘れて聞きとれてゐたが、不思議なことには、その音調が忽ち亂れてきて、遂には聞くに堪へない怪しい音色になつたので、娘は云ひ知れぬ不快を覺えてきて、どうしようか

と思つてゐると、その音ははたと止まりました。そして二三秒もたつと、今度は不潔な動物がしきりに噛み合ふやうな、凄惨な叫びが岩の中から起つてきました。娘はその叫びを聞いて、怖れてふるふる震へながら、後を見ずに逃げて歸り、それから數週間は、洞穴に行かなかつたと云ふことです。娘がこのことを語つた時も、人々は信じなかつたのでした。彼女は精神病にかゝつて、ベルナデツタのやうに評判されたいと思つて、そんな真似をするのであらうと云つて、悪魔の仕業だとは誰も考へませんでした。

又ルルド町に近いセンベといふ村のある百姓は、ある朝早くルルドの町に行かうと思つて、洞穴の前を通つた時、急に聖母の出現を思出したので、立寄つて祈らうと、そこに行つて跪いて十字架の印をしようと、忽ち不思議な光の玉に取まかれたので、腰を抜かしてしまひました。そしていくらかがいても體が自由にならないので、殆ど無意識に十字架の印をしようと、光の玉にはかに

恐ろしい音をたて、破れました。そして眞黒になつて消えたと見る間に、大空から嘲り笑ふ聲が聞えて、實に聞くに堪へない瀆聖の言葉を吐きました。その時やつと百姓の體が自由になつたので、起き上ると一散に馳せて家へ歸りました。ルルドの學者はそれを聞いてあざ笑ひながら、それは俗に狐火といふのであると、得意顔に説き明したといふことです。

また十八九才の愚ものらしい田舎の青年が、頭や顔に泥のやうなきたないものを塗つて、體には木の枝や吹流などを着けたりして洞穴の前に来て、十字架の印を大きくゑがいたり、その他様々なおかしい身振をして、終には牛の呻くやうに妙な聲を出したので、人々は笑ひ動揺いたが、その者はいつの間にか見えなくなりました。

それから又、或家の一人の下女が、ベルナデツタの真似をして人氣でも取らうと思つたのか、ある日洞穴に行くと云つて主人の家を出て、途中は被物

で顔を深く包んで、うつむきがちに歩きながら、人から何を云はれても聞えな
いふりをして、無言のまま洞穴の前に着きました。やがてそこに平伏して、神
の感應でも得たかのやうに祈を誦へて、時々微笑をしたけれども、それはたゞ
顔に少ししわを寄せるだけで、また祈もたゞ唇を動かすだけで心から出るの
ではなかつたのです。そして舉動がいかにもわざとらしいので、たゞ人々から
笑はれるばかりでした。それで、前の愚者らしい田舎の青年と同じやうに、し
まひにはたうとう姿を見せなくなりしました。

これ等の外、盛装た聖母を見たといふ者や、ユリの花を持った聖ヨゼフを見
たといふ者があつたり、またクリストのちき弟子を見た、名高い聖人を見たな
どと云ふ者がありました。それはたゞそれだけではなく、その聖人は化粧した
賣女のやうに一目見た所美しいやうであるが、近づいて見ると、世間臭くて、
その卑しいことは見るに堪へないなど、本當らしく云ひふらす者もありまし

た。

かうしたことは、皆悪魔のそゝのかしから出たもので、悪魔はかうして洞穴
の聖い出来事を妨げようとしたのであります。

ある時エストラド氏は、アルジエレス町の税務署に勤めてゐる二人の友だち
が訪ねてきたので、いろいろ話をしたあげく、洞穴のことを話し合ひました。
彼等はそれを本當にしなかつたけれども、一度見ようと云ふので、案内をエス
トラド氏に頼みました。

やがて三人は連立つて洞穴へ行くと、洞穴の前にはルルド町のジョゼフィヌ
といふ全身硬直にかゝつてゐる娘がゐて、その周囲には彼女の友達らしい
十二三人の若い婦人等が、彼女を驚き顔で見守つてゐました。

三人は近づいて見たが、顔は美しいけれど、凄味があつて、いと悲しげに手
を合せて息をこらしながら祈つてゐたが、眼からは大粒の涙が頬を傳つて流れ

て、時々起る烈しい感動に祈の調子が狂ふ様子は、ベルナデッタの有様とは、とても比べることの出来ないものでした。

二人の友だちは、それを始めて見たので、ひどく感動して、跪いて祈をし、ポケットから銀貨を出して、聖堂の建立の費用にと思つてさいせん兩に投げ入れました。エストラド氏も一時は感動して、またベルナデッタのやうな者が出たのかと思つたが、ベルナデッタに比べて考へてみると、物足りないことが多くあつたので、自然と感服もうすらいだが、後でこの娘の自白によりますと、自分が見たのは疑はしいと云つたとのことでした。

悪魔はこのやうにいろ／＼様々のことをして、聖母に信頼む人々が洞穴に行く信心を冷まさうとしたけれど、それは結極むだにすぎないのでした。聖母の溫和な清い光に照されては、朝日に消える霜のやうに、いつしかその力も抜け、再び洞穴に妨害をするやうなことがなくなりました。

知事の煩悶

すべての事は天主の攝理でありました。その攝理は靜かに人々の心にしみ込んできました。そしてルルドの姫君をさんびする人達は日増に多くなつてきたのでした。

しかし安心の出来ないのは、知事のマツシ男爵でした。彼はルルドの事件を一笑のもとに排斥して見たものゝ、十九日と二十四日のジャコメ警部の報告を受けて、非常に煩悶におちりました。ましてその出現者が聖母であると云ふに至つては、事がおだやかでないと思つたのでした。彼は輕卒にも、大臣へ迷信にすぎないことであると云つたが、事實はどうやら反對のやうでありました。これは今の中に何とかしなければならぬ。さうでなければ自分の位置が危くなると思ひ出したので、色々考へた上、ベルナデッタを發狂者であるとしま

した。そしてその發狂者は、一種のおだやかな狂人であるから、あまり害はないやうであるけれど、殊に想像の力に富んだと云はれるフランス南部の人民の間に、こんな者を捨て、おいては害がないとも云はれないから、醫師に診察せて、治療の名前で精神病院に入れた方がよい。さうすればこの事件は自然になくなるであらうと考へたので、早速ルルド町長ナカデに書面を送つて、次のやうな命令をしました。

「彼の少女は一種の精神病にかゝつた者であると思はれる。就ては、この際醫師に診察させ、治療のため精神病院に入れさせるやう、取計ひありたし。」

尙知事は翌二十六日には、更に次のやうな書面を教務大臣に送りました。

「ルルドよりの報告によれば、マツサビエルの洞穴には、その後又々多數の人民が集つて、殊に二十五日の朝、少女が再び出現者に逢ひたりと言ひふらしたる爲、集まる者一層多く、今はすでに洞穴に種々の飾りをなし、供物などを捧

げて、恰も聖堂の如くになつたといふことである。つまり彼の少女は、精神病にかゝつた者であらうから、醫師に診察させた上治療のために精神病院に入れるやう取計へと町長に申付けた。今後行政官の務として、如何なる處置を取るべきや、あらかじめ閣下の御意見を伺ひおきたし。勿論洞穴に參詣したとて、別に罰すべきこともなく、且今日までの處は、至つて平穩で少しの混雜も出さないとのことである。小官の考へとしては、かうした事件を止めさせるには、教會の職員を頼むより外なからうと思ふ。もつともこの考から、司教は目下不在中であれば、副司教とルルドの司祭ベイヤマルとを招いて、洞穴のことに就て意見を訊いたが、彼等は自然を超えた出來事であると明白には云はないけれど、全くさうでないとも言ひきることを遠慮するものゝやうであつた。つまり教會の態度は最初と違つて、少し意味あり氣になつてきたが、今や沈黙の境を超えようとするものらしい。されば閣下より司教にその旨を通せられ、そし

て小官の執るべき方法を御示しあられたし。」

これによつて見ますと、知事は洞穴事件を専ら教會に委せて、自分の責任を逃れようとしたらしいのです。彼が町長に命じて、ベルナデッタを醫師に診察させたのも、たゞ大臣に對する申譯にすぎないのでしたらう。

さて、ルルド町長ラカデは、知事の命令で三人の醫學博士を頼んだが、この三人のうち二人は、ルルド町に住む者で、一人は外から招いたのである。さうして醫學博士ドズス氏には遂にこれに關係させませんでした。公平にするなら、博士ドズス氏の如きは、初からベルナデッタの様子を見て、幾度も彼女を調査してその事情にも通じてゐるから、今回の任に當らせるのが至當であります。反對に博士を除いたといふのは、博士が前にこの事件を、自然を超えた現象らしいと云つたことがあるからでした。

とにかく、町長の頼みを受けた三人の博士は、ルルド學校で校長の立合を求

めて、診察といふよりむしろ、糾問とも云ふ態度で、ベルナデッタを呼出して發狂てゐるかどうか、幻想をいだいてゐるかどうかをまづ調べ始めました。

ベルナデッタは云ふまでもなく精神病者として調べられることを知らなかつたので、例のやうに正直に無邪氣に、博士等の質問に對して、飾らず秘さず一々明白に答へたが、博士等は警部チャコメに倣つて、様々に紛はしい質問を出して、そのわなに引かけようと計つたけれども、ベルナデッタは、たゞ何事もありのまゝに語るばかりであるから、その云ふことは條理があつて、少しも如何はしい答をしませんでした。

かうして博士等は診察を終へて、次のやうな診断書を作りました。

「ベルナデッタなる少女を、精密に診察したが、精神状態には格別の異状を見ない。性質は極めて正直で信實であるが、たゞ普通の者に比べて、感覺がやゝ鋭い位のもので、或は少しは幻想にかゝつてゐるかも知れない。多分洞穴に於

でも、日光の反射を見て、聖母マリアの姿と思ひこんだものであらう。

しかし我々の認めた所では、この病氣は幻覺にかゝつたものであるとしても、別に害になるべきものでないから、治療をさせる必要はない、もつとも發作るときは或は異常つた様子もあるだらうが、その状態が元にかへると共に、自然と洞穴のさわぎも消えるであらうと思ふ。」

こんなあいまいな診断書を町長は四月一日に知事へ送つてから、洞穴の近頃の様子を報告して云ひました。

「マツサビエルの洞穴に參詣する者は、その後も相變らず多く、殊に復活の祝日も近づいてきたので、尙一層多くなつてきた。然し復活の祝も過ぎたなら、勿論少くなると思ふ。」

ルルド町はこの事件のために、何等の迷惑も受けず、至つて静かであるから、みだりに參詣を制止める譯にもいれないが、如何取計ふべきや、よろしく御指

示下さるやう、私共はたゞ御命令に従ふばかりである。」

知事はこの書面と、博士等の診断書を見て

「愚な民の宗教狂には困る」

と獨言をもらしながら呆れました。

警部チヤコメからは毎日のやうに報告し、町長ラカデからも、その後度々報告しました。その手紙の一つには次のやうなことが書いてありました。

「先般復活祭後は、參詣人も減るものであらうと報じたが、意外にも減らないばかりか、増々加はるのみである。試みにその数を計算したが、四月四日は九千六十人の多きに達した。そのうちルルド町の者は四千八百餘人であるから、他の四千二百餘人は所所から來た者である。」

知事はこんな報告を得て、増々不快に思つて、どうしたらよからうかと感うて、教務大臣にこの事を上申して、その命令を待つてゐるのでした。

その間に教會側では、どんな態度をとつたかと云ふと、司祭ベイヤマル師は、これまでの状況を司教に報告したが、司祭の報告は、別に實地について取調べたものではなくて、皆聞いた所によつたのであるから、云ふ所がまち／＼で一貫してゐませんでした。ベルナデツタを或は聖女のやうに傳へ、泉の湧き出た時、その濁つた水を飲んだり、顔を洗つたことなどは、發狂者の所爲であると聞いたまゝを報じたから、司教も大に惑つて、まづ司祭等に、この際直接關係しないで、別に確かな人を使つて詳細く調べさせて、眞實を報告するやうに諭しました。けれどもその後泉の靈驗も著るしく、出現の姫君も或は聖母であるかも知れないと思つてゐた所、三月二十五日には、出現の姫君が、いよ／＼聖母であると明し給うたと聞いて、心ひそかに喜んだが、あせらずに時の到るのを待つてゐました。所がはからずも、三名の醫學博士の診斷書が司教の手に入つたので、司教はもしや診斷書の通り、ベルナデツタが幻想にかゝつてゐるの

ではなからうかと心配して、四月十一日ルルドの司祭に書面を送つて意見を述べて申しました。

「あの洞穴の事については、余は自然を超える出來事でないとは云はないが、醫師等の認めた診斷書が、果して根據があるものであるかどうかを確かめたいと思ふから、當分ベルナデツタを洞穴へ行かせないやうに配慮して欲しい。」

この書面が、ルルド教會に届くと同時に、教務大臣の訓令は、知事の手許に達しました。その訓令には、

「本大臣は、かの洞穴事件を以て、公教の信仰を害し、人民の宗教心を惑はすものと考へるから、これをうちほろぼすことが必要と信するものである。」

元來政教二つの權の裁可を経ないで、勝手に拜禮所を設けることは法律の許さぬ所である。正しく云へば、その洞穴は、今や裁可なき拜禮所の如くなつてゐるものであれば、之を閉るのが、最もあたりまへの處置と信する。然ども、

今直ちに之を行ふならば、人民のさわぎを起すおそれがある故、まづ少女が洞穴に行くのを止め、彼處に對する公衆の注意を除き、以て參詣者の數を減すに至らしめるのを待つの外なからう。

而して、是等のことを行ふには、教會の職員と一致協力することは、貴下のため必要なことであれば、タルブ司教と直接交渉して、適宜きやう取計はれたらう。

本大臣は、司教及宗教の威信を害ふべきこの事件に對して、自由行動を取るは、大臣として之を許さぬ旨、貴下より司教に傳へらるゝことを望むものである。」

とあるので、知事は大に安心しました。何故なればこの訓令は自分の責任を軽くして、しかもその處置は自由であるからです。知事は早速この訓令を持つて司教を訪れました。

知事と司教の意見の違い

その頃、ルルドの屬してゐる教區の司教は、ベルトラン・セバエール・ローランスと云ふ人でありました。彼はすぐれた勉強家でまた細密な性格の人であつたから、すべて決斷をなし處分をするには深く考へねばならぬと思ひました。

さて、知事は司教を訪れて應接間に通されると、日常の挨拶をしてからすぐ洞穴の事件を語り出しました。

「洞穴の出來事は自然を超える性質のものであるかどうかは、私は知りませんが、ルルドとその附近では、これが爲に精神的の混亂が起りつゝあると聞いてをります。一體あの出來事は何でありませう。果して自然を超える性質のものでありませうか。何しろ今から適當な處置をしなければ、一般の信仰を悪くして、宗教上に影響することも少くはなからうと思ひます。あなたはこれに對

してどう思はれますか。私の考へでは、閣下の信じられる所によつて、いづれとも決めて、公に発表なさるがよからうと思ひますが……」

と云ひました。

「私はこの事件を、そんなに心配するには及ばないと思ひます。そればかりでなくこの事件は、仰せのやうに急いで處置することは出来ません。何となれば出現の眞か偽かは容易く決められるものでもなく、この事件が善か悪かさへもまだ判別がつかないからです。で、司教である私の務としては、當分の間何れとも判断せずに、成行を待つて徐かに取調べるのが、適當の處置かと思つてゐます。私の意見としてはこの通りでありますから、貴官から大臣へ、さやうお告げ下されても差支はありません。」

と云ひました。

知事は不安さうな顔をして、

「ですけれども、今閣下がこれを御決定なさらなければ、遂には平和が保ち難いやうになるかも知れません。」

「いや、私はさう思ひません。何故かと云ふに、洞穴に集る人々は、祈を誦へながらゐるからです。祈と云へば、安和を求めぬ心から出るものであれば、さやうな危険いおそれは決してないと思はれます。」

「然し、洞穴に集る者は祈をする者もあるけれど、また、嘲笑ふ者もあると云へば……」

「貴官が受取られた報告には、眞實を缺いたものが多いと思はれます。洞穴に集る人々は、皆靜かにして慎んでゐます。それは確かな證據があつて言ひきることが出来ます。けれども、それはそれとして、貴官から御覽になれば、ルルドの事件などは行政をする爲に厄介物にすぎないでせうけれど、私から見ると、あの事件は頗る高尙で意味深いものであるから、今後深く考へてよく調

査するつもりです。貴官と私とは、意見が根本から違つてゐるやうですから、この協議はまとまるものとは思はれません。」

「みだりに拜禮堂を設けることは、法律が禁じてゐる所です。所がマツサビエルの洞穴は、今現に聖堂の裝飾がされてゐるのですから、これは法律上看過し難いものと云はねばなりません。」

「國の法律にふれるのなら、それは御心配に及ばないことで、よろしいやうに貴官の権能によつて御實行なさるがよいでせう。しかし云ふまでもないことですが、これを處分するには充分御考へになつてから、なさる方がよからうと思ひます。」

と司教は靜かに物語りました。

「いや、閣下がお守りになる所があるやうに、私にも亦守るべき法律がありません。私はその御規に従つてどこまでも任務と信ずる所を果さねばなりません。」

かう云つて知事はひどく冷かな態度で歸りました。

知事は洞穴事件について司教と相談の上で取鎮めようとしたけれど、意見が合はないので、斷然自分一人の權勢によつておし鎮めようと決心しました。そして五月四日、徴兵検査のためルルド町に出張した機會に、この地方の町村長を集めて云ひました。

「本年二三月頃から、この町端で一人の婦人が、貧乏人の一少女に現れるといふうはさが立つて、それから町の者ばかりでなく、附近の人民や、遠方の者までも騒ぎ立て、愚な迷信にだまされ、ばかな行をして、これを宗教的な行爲と心得てをるやうであるが、これは云ふまでもなく、本來の宗教心をみだし、世のなかの平和を妨げるものであるから、決して捨て置くべきものではないのです。かう云ふことの取締については、すでに定つた法律があるから、充分の制裁を加へることは易しいけれど、わしの配下の人民に對してそんな手段を取

るのは、好ましいことでないから、何とか説諭して、自ら止めるやうに取計ひたいと思ふ。ついでには皆さん、同じく地方の平和を思ふのが任務であれば、自分その取鎮方に力をつくして欲しいものです。」

と云ひました。

このしつこい、そして誠意のない言葉には誰一人同意を表す者がありませんでした。互に顔を見合せて何の答もしなかつたので、知事は自分の意見が容れられないのを知つて、彼等を歸らしました。そしてすぐに、ルルド町長ラカデにベルナデツタを監禁するやうに命じ、警部チャコメには、洞穴の物品一切を没収するやうに命じて、自分は急いで歸りました。けれども、この處置について人民の様子はどうかと、ひそかに心配であつたので、万一の用意にと思つて、騎兵の出動まで求めておきました。

知事の命令に對する町長の態度、並びに司祭の意見

ルルド町長ラカデは、最初この洞穴事件は怪しいものと疑つてゐたが、毎に不思議な事實が現れてくるにつれて、少し心が動いてきたので、自分はなるべく關係しないやうにして、たゞ職務の上止むを得ない事ばかり報告するやうにしてゐました。所が、今知事から、ベルナデツタを監禁しろといふ命を受けたので、彼は全く困つてしまひました。それに知事は人民の騒動を豫想してもう騎兵隊の出動の用意までもしてあると聞いたので、今後どうなることであらうかと、ひどく恐れて心配しました。しばらくの間、彼は天主のみいづを怖れると共に、知事の權勢と人民の氣勢とに板ばさみとなつて、たゞぼんやりしてゐましたが、検事チュートルを訪れて詳しく事情を語りました。そして検事と一緒に、司祭ペイラマル師に逢つて意見を求めました。ペイラマル師は二人

に向つて、

「検事さん、あの少女は罪人ではありませんよ。これまで貴下達が度々訊問されて知つてゐられる通り、彼女には少しも罰すべき所がないではありませんか。わがフランスの裁判では、彼女のやうな無罪者を罰することのないのは勿論貴官の御存知の所で、たゞ拘引することさへも不法であるばかりでなく、罪のない者を亂暴にも監禁するといふやうなことは、検事である貴官として、よろしく禁止すべきことではないでせうか。」

と云ひました。検事デュートルは、

「いや、さういふ理由ではありません。知事が監禁しようとするのは、醫師の報告によつて、彼女を發狂者と認めたので、治療を加へてやらうといふ、全く行政上の處置を取つたに外ならないのです。」
と辯解しました。

これ聞いた司祭は少し激した態度で、

「あゝ、さうですか。果して御話の通りであるなら、それは殘酷きはまる惡むべき處置と云はねばなりません。何故かと云ふに、保護といふ口實で、憐れな未丁年者をむりに閉こめようとするからです。一體この事件について、司教や司祭の私達が早まつて判断を下さずに、徐かに證據が現れるのを待つてゐるといふのは、深く考へる所があるからなのです。それにベルナデツタの正直なことと、精神の健全なことを知つてゐるからでもありません。所がああ三人の醫師は何者ですか。少女の頭腦に異状のあることを確かめたのでなくて、輕々しく發狂者として片附けてゐる。誰がそれをたやすく信するものですか。現にあの少女の言葉を聞いたり、動作を見たりして、感動してゐる人が幾百人もあるではありませんか。それをかくの如き薄弱な口實の下に、彼女を監禁しようとする。これを不法と云はないで、一體何が不法と云はれませう。」

と云つて、その顔には犯しがたい威厳が現れておりました。
検事はそれをさへぎつて、

「それには又、相當の理由があつて……」
と云ひますと、司祭は、

「いや／＼それは不法です。ルルドの靈父として、またこの小教區の主任司祭である私は、牧する羊群の中で、殊に幼くて弱い者に一層保護を加へなければなりません。ですから、もし暴力を以て彼等を迫害するやうな者があれば、私はたとへ一命をなげだしても救はなければなりません。それは私等の重んずべき職務です。」

それで、もし知事が正しくない法律の命令を武器として向つてくることがあれば、私はどこまでも禦ぐ決心ですから、さう知事に告げてください。知事がもし部下の憲兵等に、憐れなスピルス一家を襲はせたなら、必ずその家の敷居

にいかめしく立塞がつて防ぐ者があるのを見るでせう。憲兵等は少女を捕へる前に、まづそれを倒して土足にかけ、さうしてそれを踏越えねばならないでせう。それは誰、他人ではない、私です。」

検事は尙も、

「しかし、しかしながら……」

と云ひかけたが、司祭はそれを押えて、

「何、しかし……この際しかししながらなどと云ふ反語はご無用です。貴官はただ、このことに就て充分の研究をなさるがいゝでせう。それはもつとも貴官の心任せではあるが、公衆のひとへに望む所は、たゞそればかりです。もし深く考へないで、みだりに罪のない者をいじめ、つもりならば、まづわが羊群の幼弱いこひつじを捕へる前に、その牧者なるこの私を捕へなさい。」

と云つて、きつと立ち上りました。その語氣といひ、態度といひ、實に侵し

がたく見えました。

検事と町長とは、暫く黙つておりましたが、やゝあつて、徐かに洞穴についての處分のことを訊ねました。司祭は答へて云ひました。

「洞穴の處分は、法律に従ふより外はないと思ひます。多くの人達が信心から聖母に捧げた物を、知事が勝手に奪ひ去る必要があるとすれば、それは爲すままに任しておきますが、たゞ信仰者は恨みもしませうし、怒りもしませう。けれどもそれは、心配せんでもいゝでせう。この土地の人達は、よく官権を重んずべきことを知つて、官権とならば少々無理なことでも服従ひます。聞く所によりますと、騎兵の分隊は知事の命令次第、いつでもルルドに攻寄せる準備が出来てゐて、現にタルブに駐屯らせてゐると云ふが、それは無用の心配であります。たとへ人民がいかにも烈しく騒いでも、私の言葉は用ひるでせう。私は兵士が来るのを待たずに、人民を鎮めておだやかにします。けれども、

兵士等がもうこの土地に乗込んで来たならば、も早どうすることも出来ないでせう。」

と答へました。

ペイラマル師の性質として、一たび自分の職務であると思込んだことは、どんな障碍があつても決して變ないのが常であるから、今度も亦さうであらうと二人も思ひましたが、この意外に激昂た態度には全く驚いてしまひました。それにこの事は行政上の處分で、検事が干渉すべきものでもないのでした。この日検事が司祭の所へ来たのは、たゞ町長に誘はれて一緒に訪れただけでした。

町長ラカデは、司祭が今語つた事は必ず實行するものであることを知つたので、司祭の知らない間に突然ベルナデッタを拘引ることは、今となつておそいと思ひました。それに、あの出現は自然を超える出来事ではなからうかと思

つてゐる時なので、非常に心配しました。それで彼は、知事を訪問してすべてを語り、そして止むを得なかつたら、職をすてゝもこの處分の執行を断るといふ意を現しました。



洞穴に於ける供物没収

知事がチヤコメ警部に命じて、マツサビエルの洞穴に献げた種々の供物を没収するといふ話が傳はると、ルルド町の人民は非常に激昂いて、常にこの事に冷淡な人々までも憤りました。

「あゝ何といふ不敬なことであらう。聖母がもつたいなくも降臨になつて、数々の奇蹟を行ひ給ふのに、こんな不敬を取るといふのは何事だ。これがために招く天主のおん怒をどうするか。」

と、がや／＼騒ぎ立てる人々の心は、今にも破裂するやうな有様となつたが、司祭ベイラマル師は、かねてからかうなるであらうと心配して、町長や検事と會談する前から、他の司祭等と力を合せて及ぶかぎり鎮撫に努めたのでした。「わが親愛なる友よ、一時の怒にまかせて、世の中の平和を亂してはなりません。

ん。たとへ不正であると思つても、法則に従ふことを忘れてはならないのです。もし聖母がごらんになれば、却つて光榮となされるでありませう。それを皆さんが亂暴な舉動をなさるならば、却て信仰を薄くするので、恵を受ける道がないのです。あの昔の殉教者をごらんなさい。彼等は帝王に抗ひましたか。いや。彼等は抗はなかつたから、遂にはあの勝利を得たのではありませんか。」

司祭ベイラマル師は、人望が非常に高くて、人民に對して道德的命令の力を持つてをつたけれども、この時の人民の激昂はなかく、少しばかりでないので、さすがのベイラマル師もやうやくのことで鎮撫めることが出来た程でした。

一方、ヂヤコメ警部は洞穴の物品を没収するため出掛けましたが、獻げられる物の数が非常に多い上に、重量もかなりあつたので、容易に運ぶことが出来ないと思ひました。そこで、常に郵便物などの運搬を取扱つてゐる馬車會社の長バリオージェエの所へ行つて、馬車を借りることを申込んでみますと、社

長は、

「さういふ事のためには、馬も車もご用立ることは出来ません。」
と、斷りました。

「相當の賃金を支拂つたら、斷ることは出来ないぢやないか。」

「いや、私の馬は郵便用に充てるもので、そんなことの爲に備へてあるのではありませんから、斷じて貴官の命に従ふことは出来ません。もしそれが御不満でいらつしやるならば告訴なさるとも、貴官の御勝手になさるがいでせう。」
と、云はれたので、さすがの警部も返す言葉がなくて、しをく立ち去りました。そして彼方此方とさがしたけれども、すげなく斷られたので、やつきとなつて部下の巡查を引つれて、馬車を借りようとしたけれど、誰一人として應ずるものがありませんでした。この有様を見た人民は、密かに罵つたり、あざ笑つたり、中には聞くに聞かれない悪口を云ふ者もあつたので、警部は大勢か

ら目をつけられるのを不愉快に思つて、この上は不相當の賃金を支拂つても面目を保たうと考へて、僅か二三丁の道程に三十フランの賃金を出さうと云ひ出しましたが、明日食ふに困る貧乏人でさへ、それに應ずる者がありませんでした。人達はその三十フランのことを聞いて、ユダが銀三十枚で主クリストを賣つたのに、よく似てゐると語り合つたといふことであります。

所が警部は最後にある鍛冶屋を訪ねて、その家の娘から馬と車を借り受けたと云ふことを聞いて、人民は非常に怒りました。それはこの家が左程貧しくないのに、慾に迷つて警部の言葉に従つたからでした。

これに力を得た警部は、巡査に命じて馬車を引かせてマツサビエルに向ひました。多くの人達は怒を押へ黙つてそのあとから洞穴に行きました。車は洞穴の近くまで入れるのが困難なので、少し離れた所に置いて、警部と部下とは洞穴に進みました。

この時、洞穴には蠟燭の光があちこちに輝いて、熱心な信仰から飾られた十字架や聖母の御像や、それから畫像、花冠、頸飾、寶玉などが、岩の間や地上いつばい並べてありました。そして聖母の畫像の下に絨氈が敷かれてあつて捧げられた種々の造花は、それぞれの色を競つて、供へられた五月の生花はよい香を放つてゐました。この外かごの中や地上には何百圓とも知れない金貨や銀貨が光つてゐました。これは、聖堂建立の費用にと思つて、信心の人達が捧げたもので、これまでたゞの一度も盗まれたことがなかつたものでした。

チャコメ警部は、職工に造らせた柵を乗り越えて洞穴の中に入つて行つたが、さすがに良心の咎を感じたものか、少しためらふ様子が見えました。そして巡查を傍に引寄せてをり、人民は黙つてどうなるかと眺めてゐました。この間の静まつた有様は、その底に恐しい殺氣がひそんでゐるのが思はれました。

警部はまづ、散らばつてゐる貨幣を拾ひ集めてから、燈火を消して、順次に

十字架、花冠、絨氈などをとりまとめ、巡査に命じて車のあたりに運ばせたが、巡査等は職務とは云へ、何となくかうした聖い物品に手をつけて、車に積みねばならぬと思へば、ひそかに恐れて心を痛めてゐる様子が見えて、氣の毒さうでした。

警部は巡査ばかりでは手不足でもどかしく思はれたから、人々の前に見てゐる子供を呼んで、

「おい、これを馬車の所まで持つて行け。」

と聖繪を渡したので、子供は何心なく受取らうとしますと、側の子供が、

「おい止せよ、天罰があたつたら、どうする。」

と云つて、やにはにそれを止めましたので、子供ははつと手を引込めてしまひました。

かうしたふうに、子供に至るまで一々警部の意に従はないのでした。それと

知つた警部は少し逆上させた様子でとり片付けてゐたが、過つて聖母の御像を破つたり、花束を取つて河の中に投げ入れかけたので、この時までちつと黙つてゐた人々は、忽ちがや／＼さわぎ始めました。

やがて大概片附いたので、警部は柵を取除かうとしたが、折悪く斧がなかつたので、近くの木小屋で木を割つてゐる人達に、斧を借りようとしたけれど、誰も貸してくれる人もないから、頗る困つた様子であつたが、そこから少し離れた所に一人の職人を見つけたので、つか／＼と近寄つて、

「おい、その斧を貸してくれ。」

と云ふと、彼は警部の威勢に恐れたのか、云はれるまゝに貸してくれたので、警部はそれを持つて、手づから柵を打ちわしました。

所が次の日、警部に車と馬を貸した鍛冶屋の娘は穀倉から落ちて肋骨を挫いてしまひ、斧を貸した職人は、材木を運ぶ時に、重い材木を落して兩足を碎い

てしまつたのです。それを聞いた多くの人達は、その不思議な出来事に恐れて、ひそかにさゝやき合つてゐたのでした。

これは後で知れたことですが、當日こんな亂暴な行ひを見た人々は怒が極度に達して、警部を捕へてガブ川の急流に投げ込まうとする程の勢であつたので、警部の顔色はまるで土のやうに變りました。そして急ぎ込んで云ふには、

「わしのすることは、わしの本心からすることではない、わしは實際こんなことを、しなければならぬ立場にあるのを残念に思ふ。わしはたゞ長官の命令によつてやるだけのことで、官吏はどんなことでも、長官の命令に従はなければならぬのだ。どうか諸君察してくれ、この責任者はわしではないのだから。」と、悲しさうな聲で辯解を試みるのは、氣の毒にも見えたが、その時人々の中から、

「靜かに、靜かに、亂暴するな。すべてのことは皆天主の聖意にお任せすべき

ものだ。」

と叫んだ者があつたので、人々は靜かになつたのでした。それはかのペイラマル司祭でありました。

やがて警部や巡查等は、何の妨げも受けず全部の品物を町役場まで運びました。そしてその献物を、元の所有者に返さうとして、太鼓を鳴らして町中にふれを廻したので、これを聞いた婦人等は、われさきにと馳せ集つて、誰かれの差別なく手當り次第に品物を持つて、再び元の洞穴に運びました。そして元通り飾つて、一同さんび歌をうたつて、今日犯された瀆聖の罪をわびるために、多くの蠟燭を點して、一種の示威運動の行動を示したのでした。

知事は思つてゐたことなので少しも驚きませんでした。却つて人民の反抗を心ひそかに望んでゐました。何故かと云ひますと、彼はこれを口實に人民を處罰しようとして心に企んでゐたからです。けれども、今事を荒立て、人民の騒ぎ

をひき起したならば、町長ラカデはすぐ職をやめてしまふであらうし、徳望高いベイラマル師は力限り干渉するに違ひないので。その上勝手に聖物を取り去つたことを、その筋へ訴へ出るかも知れません。そして公教新聞は勿論のこと、獨立公平な新聞紙からも烈しい攻撃を受けなくてはならないでせう。これ等のことを考へては、さすがの知事も心を傷めずにはゐられませんでした。

一體高慢な人の心は、過を改めることがなし難いものです。心の敏い知事はとくに自分の非を悟りながら、一度出した命令を取消することが、何となく威厳に關するやうな氣がして、どうしても改めないばかりか、その後も捧げられるさいせんを、毎日税務署の役員に命じて納めさせておきました。そして前の婦人達の仕打に對しては、争ふのは大人氣がないとして、再び没收の命令はしませんでした。そして、ベルナデツタを監禁することについては誰一人として知事の意見に賛成しないばかりか、今はあべこべに、兵士憲兵等に至るまでベルナデ

ツタを尊敬し、これに同情を持つてゐるので、さすがの知事もそれ以上我意を押し通すことを恐れて、そのことは放つて置くことにしました。

けれども、かの診断書があいまいなものでなく、確かにベルナデツタの精神錯亂を證明したものであつたなら、知事はすぐに名高い醫師をやつて第二の診断をさせ、明白な理由をもつて否應なしに處分したのでせうが、却つて精神健全、思想堅固といふ反對な證據がある上に、多くの支障が起つてくるので、さすがの知事もどうすることもできなくて、こんな手ぬるい處置をしかたなく取つたのらしいでした。

それでも頑迷な知事は、ひそかに企をなしとげようと思つて、時機を待つてをつたが、この時丁度チャコメ警部から一つの報告書が届きました。

「ルルドの司祭もやうやく迷ひから覺めて、かの事件が偽りであることを悟つて、信者達に向つて洞穴に行かないやうにせよと説諭した。」

知事はこれを読んで大に喜びました。間もなく、司教から公然に洞穴に行くことを禁止する報書が出るであらうと待つてゐたが、どうしたことか空しく日を過すばかり、何のさたもなかつたので、又々心を苦しめて、種々工夫をめぐらしてゐました。

ヂヤコメ警部は一體どうして、こんな報告書を知事に寄せたかと云ふに、彼の部下の一巡査の探偵の誤りから出たものらしいです。それはかの洞穴に悪魔が度々現れると聞いたので、或日司祭は信者に向つて、

「附添なしに、子供等を洞穴にやるのは危険いから、注意するやうにしてください。」と話したのを、巡査が聞き違ひして報告した爲であつたらしいのです。



泉の水の分析

そのやうな大騒ぎの間にも、聖母の御恵は泉と共に湧きあふれて、多くの人達の心と體を救ひました。たゞ盲者にも似た反對者ばかりは、異つた論を立て、泉の靈驗をしりぞけるばかりでなく、「その湧き出ること」さへも打消さうとして次のやうなことで放言つてゐました。

「迷信の者共がさわぎ立てる、泉の運命も、今少しの間であらう。あの周囲の山にある雪がとけてしまふと同時に、泉の水も涸れてしまふであらう。」

このやうな流言は何も値のないものでした。周囲の山々の雪が全くとけてしまつても、靈泉の水は相變らず盡きないのです。そして難病平癒の靈驗はいよく著しく現れてきました。中でも彼のブリエツトやクロワジヌの如きは、自分の難病が平癒つたことを世に發表しました。また一度はこの不思議な効驗

所が今まで大失敗をして非常に不満であつた知事は、この請求を受けて大層喜びました。

「よし、これはよい事が出来た。これできつと、迷信者の夢を破ることが出来るだらう。」

と思つた知事はその友人にラトウルといふ薬剤師があつたので、急いで泉の水を取寄せて、その分析を彼にたのみました。

ラトウルは化学者としては、さう學識がある程でもなかつたが、常に縣廳の用を達して、上官の機嫌をとることは巧な男でありました。

彼は知事の依頼を受けて、まづ洞穴に湧き出る泉の水を分析し結果を次の如く發表しました。

「この水は無味無臭透明り、その比重はほど蒸溜水に均し。而してその含有物は次の如し、

一、ソーダ、石灰、マグネシウムの鹽化物多量。

二、炭酸鹽、炭酸マグネシウム。

三、石灰、礬土、硅酸鹽。

四、酸化鐵。

五、硫酸ソーダ。

六、磷酸鹽少量。

七、有機物。

等にて、硫酸石灰並に透明石膏等は、いさゝかも含みをらざれば、飲料に最も適し、胃に軽く、消化し易く、人體の調和を保つ効能あり。」
と、尙彼はつけ加へて、

「この水質及含有物を調査するに、近き將來に於て、恐らくは醫學上より特殊の治病的効驗を發見せられ、わが地方の礦物的富源の中に加へらるゝに至ら

所が今まで大失敗をして非常に不満であつた知事は、この請求を受けて大層喜びました。

「よし、これはよい事が出来た。これできつと、迷信者の夢を破ることが出来るだらう。」

と思つた知事はその友人にラトウルといふ薬剤師があつたので、急いで泉の水を取寄せて、その分析を彼にたのみました。

ラトウルは化学者としては、さう學識がある程でもなかつたが、常に縣廳の用を達して、上官の機嫌をとることは巧な男でありました。

彼は知事の依頼を受けて、まづ洞穴に湧き出る泉の水を分析し結果を次の如く發表しました。

「この水は無味無臭透明り、その比重はほど蒸溜水に均し。而してその含有物は次の如し、

一、ソーダ、石灰、マグネシウム、の鹽化物多量。

二、炭酸鹽、炭酸マグネシウム。

三、石灰、礬土、硅酸鹽。

四、酸化鐵。

五、硫酸ソーダ。

六、磷酸鹽少量。

七、有機物。

等にて、硫酸石灰並に透明石膏等は、いさゝかも含みをらざれば、飲料に最も適し、胃に軽く、消化し易く、人體の調和を保つ効能あり。」

と、尙彼はつけ加へて、

「この水質及含有物を調査するに、近き將來に於て、恐らくは醫學上より特殊の治病的効驗を發見せられ、わが地方の礦物的富源の中に加へらるゝに至ら

んと云ふも過言に非ずと信ず。」
と云ひました。

けれどもこの分析は、科學上承知することが出来ませうか。彼はこのやうに細密く調査しながら、何故このやうに多數の含有物があるものを「その比重ほど蒸溜水に均し」と斷言したのでせう。何を標準にして少量或は多量などのあいまいな言葉を用ひたのでせう。また最も重要な醫効物質の分析を省いたのは何のためでせう。

反對派の人々は、かうした粗略な分析書に満足して、前後の考もなく、日頃の主張が敵中つたのを喜んで、まるで勝ほこつたやうな様子でクラブに集りました。そして信仰派の人達に向つて、

「諸君が主張する不思議な平癒といふことについては、一步をゆづつて認めるとしても、諸君は今までの頑迷な思想から離れて、科學の前に拜禮せねばならない。要するに、超自然的事實なるものは、未開時代には、重んじられたことであらうが、文明の今日では、何等の價値がないものである。」
と得意氣に申しました。

けれども信仰派の人達は平氣でありました。いやむしろ、早計な信じ方の愚さをあはれんだのです。彼等はその不正確な分析書を信じなかつたのです。そして彼等はより以上正確な分析を得るために考へてみました。

反對派の人達はまた、

「マツサピエルの洞穴は、實際ルルドの富源地だ、近いうちに澤山の旅人宿や、遊戯場が建てられよう。」

と云つて冷笑しました。それは事實その通りでしたが、遊戯場は建てられないで、病院や祈禱所が、立派に建てられました。

知事の禁令と反對者

前にも述べた通り、藥劑師ラトウルの分析書は、あいまいな點が多いから、勿論信するにたらぬものですが、反對派の人々は非常に喜んで、これを唯一の武器として信仰派の人々を攻撃しました。知事も亦その報告書を手にして非常に喜びました。

フランスの法律によりますと、鑛泉を發見して之を一つの營業として公に用ひるには、必ず地方長官の許可を得なければならぬのです。それで、知事は分析報告書の治療的物質なる文字に基づいて、マツサビエルの洞穴の泉水の水を一つの鑛泉と見做して、この法律の條文に適用して處分しようとしたのであります。

マツサビエルの洞穴は、云ふまでもなくルルド町に屬してゐるものであるか

ら、この土地の町長は、誰でも此處に立入ることを禁止する權利があるし、又その泉水も、これまで營業として用ひた者はないけれど、多くの人達が飲んだり浴びたりするのを禁止することは出来るのでした。そして町長が一旦禁止する旨を告示した上は、強いて參詣する者を當然法律によつて罰することが出来るのだから、二三回も厳しい處分をしたならば、人民もこりて、遂には思ひ止まるに違ひないと、知事は考へたので、町長には一言の通知もなく、勝手に制令書を作つて、町長の承諾も受けずに、町長の名を書いたりして、印刷して町長に送りました。そして町の所々に掲示することを命じました。その禁止の條目には次のやうなことが書いてありました。

第一條 洞穴の泉より水を汲み出すことを禁ず。

第二條 マツサビエル河岸と呼ぶ共有地を通行することを禁ず。

第三條 洞穴の入口に立てたる柵内に立入り、若くはこの地を過ぐることを

禁ず。

第四條 以上の命令に背きたる者は法律に従つて之を處分す。

第五條 警部、憲兵、巡查及町役場吏員は禁を犯す者の氏名を書き留むべし。

千八百五十八年六月八日

ルルド町役場にて之を發布す

知事
町長

この横暴極まる制令書を見た町長は、非常に怒り。すぐにペンを執つて、「余は、余の名を無断にて署名することを許したることなし。」

と添書して、その制令書を突き戻しました。町長の怒と堅い決心とはこの短い添書によつても明かに見えたので、さすがの知事も困りはて、おだやかに二三度交渉しました。けれども町長は少しも心を動かしませんでした。知事は

いよ／＼困りました。その時幸ひにも仲裁人があつて「長官の命によつて之を掲示る」と云ふ附言をさして、町の所々に掲げさせました。そして洞穴の周圍に木柵を立てて、「この中に立入る者は、裁判所に召喚して之を罰すべし。」

と、札を示して巡查に立番させ、厳しく警戒させました。

この禁示條目の掲示を見て、度かさなる押つけ手段に、これまで餘り信仰しなかつた人達までも怒りました。中にも恐しく怒つたのはルルド町とその附近に多い石工でした。

この質朴な石工等は最初から洞穴事件に對して、非常に熱心な信仰を持つて、毎日山に出て荒い稼ぎに疲れてゐながらも洞穴に參詣して、泉水をためる水槽を作つたり、參詣人の便利のため、険しい坂路をよくしたりして、ひたすら聖母の光榮を現さうと努めてゐたので、この抑厭の掲示を見て憤るのは決

して無理ではありませんでした。

「我々が洞穴の事件を信じようが信じまいが、知事に何の関係があるか、また泉の水を飲まうとどうしようと勝手ではないか、知事は何のために禁止するんだ、我々の人権をあまり踏みつけにしてゐるではないか。」

と、がや／＼腹立ちまぎれにさわぎたてました。そして次の日は洞穴に行く道に集つて、各々鎧を肩にして列を作つて、聖母の連禱を誦へながら勢よく洞穴に向ひました。彼等の目には知事の禁札などは何の價値もないのでした。そして彼等は洞穴の前になると、肩から金鎧をおろして跪いて忝しく聖母の連禱を唱へて、日暮頃になつて引あげて行きました。

町長や警部チャコメも早くもこの事を知つたけれども、石工等の意地の強いのに恐れを抱いたのか、これを制する力がなく、知らないふりをしてゐました。それで彼等は六月十七日に洞穴に行つて遂に禁示の掲示札を破つたり、周

圍の柵を打こわしたりして歸りました。

翌日町長はこのことを知事に報告しました。そして今度は晝ばかりでなく、夜も見張させましたが、石工等は少しも恐れる様子もなく、六月二十七日には再び柵を破りました。そしてまた建て直されたのを見て、今度は柱と板とをガブ河に投げすてましたが、見張の巡査は空しく彼等のするがまゝに任せておきました。知事はそれを聞いて非常に怒つて今度は石工等を捕へることを厳しく命じました。その厳しい知事の命令を聞いた彼等は益々怒り出して「もし巡査等が我々の參詣を妨げたなら、柵と板とのやうに河の中に投げ込む」と罵りました。それを聞いたベイマル師は非常に心配して、或日彼等が働いてる山に登つて言葉をつくして彼等の非行をいさめました。この時ばかりは彼等も承知しませんでした。しかし日曜日聖堂のうちで司祭は死を決した様子で熱心に彼等に説諭したので遂に頑強な石工等もその教に従ふことを約束しました。

司教の調査委員とその宣告

その頃タルブ司教の手許には、ルルドの事件を調査して欲しいといふ書面がたくさん届いておりました。そればかりでなくこの事實に就ての多くの證人の確かな言葉は、遂にローランス司教を動かして調査に着手することにしました。司教はそれが爲に千八百五十八年七月二十八日調査委員を定めました。

司教が調査委員を定めて、調査に着手した頃は、まだ禁止解除の命令が發布れてゐなく、知事は相變らず壓制をつづけて、人民の信仰の自由を妨げてゐたが、ファイルオル教授の分析と司教の調査委員の調査とによつて、その口實は見事に破られたので、管下のビレニアン縣では、自分の説を通して行く望がなくになりました。それで今度は世界の都會パリイに出て新聞雑誌に論評させて、自分の派の味方とする論をひき起さうとしました。

それが爲に、フランスの各種の新聞は攻撃しました。或る新聞は、奇蹟について攻撃して、これは哲學上あるべからざるもので、これが爲に調査などするのは、哲學の値を蔑視にするものであると云ひ、泉の湧出や、奇蹟による治癒は、偽であるといひました。つまり各種の新聞の攻撃はこのやうな罵詈雑言のくりにかへしばかりでした。しかもパリーの新聞記事はたちまち地方の新聞に轉載されるので、この事件についての論は國內到る處に起りました。公教派の新聞は、よくこの攻撃記事の辯解をしました。例へばリュニブエル新聞の主筆ブエリオ氏は次のやうに云ひました。

「この説明しがたい不思議な事實に對して、政府は調査以前に強壓的に排斥けたけれど、目的を達しないばかりでなく、却つて徒に人の心を激くさせた。一方その地の司教は、慎重しく時を待ち、事實を詳細く調査べ、精密に研究した正確な報告を受けることを望んだ。故に司教は調査委員を定め、この事件の

調査に從はしめたのである。故に調査の結果、眞に自然を超えた事實であることを認めたならば、必ずその旨を報すべく、もし虚偽で自然の現象であれば、また同じくその旨を知らせるであらう。然るに反對者は、この順序ある成行を待たずに、徒にがや／＼論議をするのは何の意味であらうか。彼等は司教が少しもこの事件に關係せぬやう望むであらうか。司教がこの事件を棄ておいて、妄信がいよ／＼固まることを欲するのであらうか。

一體調査委員が、これを調査することを止めようとするに就ては、もしそのやうな法律があつた所で、調査を黙つて認めることは却て國家の利益である。何故なれば、調査研究を禁じられた司教は、この事實に對して、眞か否かを判斷し、又かれこれ云ふことは出來ないであらう。かくの如くであれば、一般の妄信はいよ／＼擴まつて限りなくなるであらう。

この悲しむべき妄信の擴まるを防ぐ道は、唯一つである。即ち司教の部下で

ある調査委員の外に、我等自ら調査會を組織し、縮密に調査した結果を公表にするならば、司教の部下の調査委員は、奇蹟となすに都合のよいやうに調査をするであらうとの疑もはれていゝであらう。」

と云ひました。

公教主義の新聞はこのやうに、みだりに事實の判断をしなかつたのでした。たゞ道理と歴史との證據によつて、調査に關する權利と自由とを保護する爲に、罵詈雑言を反駁したばかりでした。

十月五日やうやく禁令が取消されたので、調査委員は始めて自由な活動が出来るやうになりました。

十一月十七日調査委員等は一緒にルルドに来て、正確な結果を得るために、まづ聖堂に參詣して、聖靈の恵を祈り、ミサ聖祭を拜みその後、ベルナデッタを呼寄せて、公衆の前で精しい質問を始めました。

ベルナデツタは、いつものやうな無邪氣な態度と質朴言葉を以て答へました。そして細かな事まで一つももらさず、姫君の御姿などについて、自分の言葉のたらない所は一々手まねで表し、かの「我は汚れなき被孕なり」と仰せられた時の有様などを表現す時は、實に人を感嘆に堪へないやうにさせる程でした。

話が終ると委員長はベルナデツタに向つて、

「お前は今話した事が偽でないことを、天主の御前で説明することが出来るか。」と問ひますと、ベルナデツタは眞面目に確な調子で、

「私は只今申上げた事が偽りでないことを、天主の尊前に誓ひます。」と答へました。

委員等はそれからベルナデツタを連れて、マツサビエルの洞穴に来て、實地に取調べたが、最初光線の反射作用で岩の奇形が眼にうつつて、妄像を引起し

たものではないかと疑つたのだが、さうした形跡は少しもありませんでした。

委員はベルナデツタに、こゝで當時の有様を示すやうに求めると、彼女は前に語つたのと少しも違ひなく、益々事實の正確なことを感じさせました。

次に泉水は事件が起る以前から、こゝにあつたか否やを調べる爲に、この土地にくはしい者を二人呼んで訊ねて見ると、

「私共はいつもこゝに来て働いてをりますので、度々この岩の下を通りますが、前にはこんな泉を見たことがありません。」

と云ひました。また他の一人は、

「昔はこゝに泉があつたといふ話がありますけれど、近頃はその跡さへなくなりました。」

と答へました。

そこで今度はこの泉の水で、難病が不思議に癒るといふことに就て調査を進

めました。そしてその恩恵にあづかつたと言ふ者を、四五人呼び集めて語らせてから、一々彼等の體を檢べて、永久的全癒のかどうかを確かめました。さうして是等の病人を診察したり療治した醫師を招いて、その全治について説明を求めました。彼のドズス博士もその一人でしたが、誰一人として學理をもつて説明が出来る者はありませんでした。

かうして委員等は、この事件に關係ある事實を調べ終つて、この地を去る時は、いづれも「あゝ天主は實にこの地を恵み給うた」といふ感じを抱かない者はなかつたのです。

委員等は更に進んで、各地方についてこれに關する調査をしようとしたが、その奇蹟の事實の数があまり多くて、一々くはしく調査することは容易でなく、その上長い間かゝることを知つて、最も著しい事實ばかりを選んで調査することにしました。しかもその調査の方法は、實に厳しく、くはしく、全治

者の病氣の性質を糺して、少しでも神經に關する疑ひがあるものや、或は醫師の意見を聞いて、少しでも學問で説明の出来るものは一切除いて、とても争ふことの出来ないものばかり、これを調査の材料としたのでありました。

このやうに細心な用意と、厳しい方法とで調査したあげく、正確で詳細い報告が出来上つた時は、はや四ヶ年の年月が過ぎておりました。司教ローランスは、その精確な報告書を受けたので、今はためらふ時ではないと、自ら判斷を下して、次のやうな宣言を發表したのであります。

「教皇ベネチクト第十四世が著した書籍上の規則に基き、ルルド洞穴に於ける出現並に之に附屬せる事實を探究する爲に命じたる委員の復命を見、又洞穴の水を用ひて治癒たる傷病者につき、その理由を討議したる醫師の調書によりて、第一に、出現の事實であることは、彼の少女の關係した事から考へても、或はこれによりて生じたる非常な結果から察しても、實にこれを自然を超えた原

因にするより外、たうてい説明する道がないものと考へ、

第二に、その生じたる結果が、或は罪人の改心といふが如き、恩寵の明白かなるしるしであり、或は奇蹟による平癒の如き、全く天主の力による他にこれなき事を思ひ、終りにかの出現の初めてあつた以来、或はその恵を求めざる爲、或は感謝の爲に、續々と集り来る信仰者のおびたゞしい數に依て、我等の證據を堅固ならしめた事を考へ、司教議員、聖職の人々、普通の信者、及び久しく宗教權の判断を待ちぬたる熱心な人達の望に副ふ爲に、又我等の管區外の多くの司教、並に高貴い人々の望を充す爲、こゝに聖靈の降臨と聖母の扶助とを求め、次の如く宣言するものである。

第一、我等は天主の御母無源罪のマリアが、ルルドに近きマツサビエルの洞穴に於て千八百五十八年二月十一日より引續いて十八回出現れ給ひしこと、及その出現が眞實の證據を有てること、並に信仰者等が、之を確實なものとし

て信仰したることは正當きものであると判定める。

但し、我等は謹んで、公教會の統治權を委任せられたる教皇陛下の判定に任せ奉る。

第二、吾等はルルドの姫君を尊敬することを我等の教區に許可す。

第三、出現の際度々仰せられたる、聖母の御意を守り、我等は洞穴の邊に聖堂を建築ることを先んじて唱ふるものなり。

千八百六十二年一月十八日

タルブ司教の命を受けて

祕書 フルカード

このやうな司教の判定の公表によつて、至る所の信仰者は、やうやく安心しました。しかし反對者達は、尙も頑固に自分の説を云ひ張り、日々現れる不思議な治癒をすべて顧みないのでした。

最終の出現

七月十六日は、カルメル山の聖母スカブラリオの祝日であつたので、すでに初聖體を受けたベルナデツタは、謹んで聖體を拜領しました。そして午後四時頃感謝のために、聖堂に入つて祈つておりました。すると三箇月程も聞かなかつた聲が、また胸にひびいて「洞穴に來なさい」と促すので、非常に喜んで、叔母ルシルの所に行つてぜひ一諸に行つて欲しいと頼みました。

この時は、知事の禁止が非常に厳しい頃であつたから二人はやむを得ず、ガブ河の右岸の牧場にと急ぎました。すると、それを聞いた澤山の人達は、我も我もと彼女を慕うて後からついて來ました。

やがて牧場になると、多くの人達はそこに集つて祈つてゐたが、ベルナデツタが來るのを見て、皆席をゆづつてその周圍に集りました。

ベルナデツタは靜かに跪いて祈り始めると、間もなくその顔は輝き出して來ました。そして彼女はいかにも悦びに堪へないやうな聲をあげて、

「あゝ、聖母は彼處に會釋しながら立ち遊ばしてゐられる……あゝ、柵の上から微笑みながら私達をこらんなされてゐられる。」

と云ひ終らないうちに、もう姫君との會話は始められたやうな様子でした。

けれども、それは例によつて、他の人達には少しもわからないことでした。たとその悦びの様子は、今まで一度もなかつた程に見えました。

考へてみますと、この度の出現は最後であるので、聖母は殊にこの日は彼女に満足と與へ給ふのではないでせうか。聖母はこの可憐な少女に惜しい名残を告げて、心を傷ませることが出來られず、いかに御心を勞らし給うたのでしたらうか。「これまでの出現を思出して、自らを慰めよ」とか「この世にはたとへなくとも來世には幸福があるのを樂しめ」とか、または「この後は現れないけ

れど、常に汝を守つてゐるから安心せよ」とか云ふやうなことを告げ給ふのであらうか。いやそんなことは申さないのです。何故かと云ふに、是等は少女が喜んで感謝する御言葉ではありませうけれど、今後再び逢ふことがないのであるから、その別れの悲しみを打消すには足らないからであります。

それで聖母は、この日慰めの御言葉を用ひなされず、たゞ一層おだやかな御姿と、慈愛のあふれる御眼とをもつて、ベルナデッタをあしらひなされておられました。そのうちに日は早くも西山にかくれようとして、あたりはうす暗くなりかけておりました。

聖母は、あふれるばかりの愛情のある御眼で、ベルナデッタを御覽なされてから、消えられたのでした。彼女はこの日の有様を叔母に語りました。「今日の聖母の御姿の美はしかつたことは、これまでにない程でした。」と。

再度、泉の水の分析

石工等の示威運動が盛に行はれた一方では、又理性に訴へ反省を促がさうとする團結もありました。それ等の團結派は、かの不正確極まる分析書に信用が出来ないものとして、町長に再度の嚴密しい分析を要求しました。するとそれを聞いた反對派の人達は、盛に罵りました。

さて、再度の分析を要求められた町長は、泉水の分析の結果は別として、この場合再度の分析はたしかに必要なことであると思つたので、町會で決議して知事に通知したので、知事も仕方なく承知して、トルツ市理科大學のファイルル氏にその分析をたのみました。

ファイルル教授はその頃フランス南部の化學者中で最も名が高い人で、殊にこの近傍にある温泉の性質に詳しいのでした。このやうな人だけに、ルルド

の事件に反対な人達も、信ずる人達も又何等の關係もない人達まで賛成して、頗る興味をもつて分析の結果を期待してゐました。そしてそれ等の情況を知つてゐたファイルオル氏は、亦非常に重い責任觀念をもつて、最も厳正しく分析にとりかゝりました。さうして凡そ二月を過ぎて、八月七日、その結果をルルド町役場に報告しました。この分析はラトウルの報告のやうに、少量または多量などのあいまいな文字は少しも用ひないで、次のやうに明白に皆その分量が記されてありました。

一キログラムの水中に	
炭酸	八グラム
酸素	五グラム
窒素	一七グラム
アンモニア	痕跡

炭酸石灰	〇九六グラム
炭酸マグネシア	〇一二グラム
次炭酸鐵	痕跡
炭酸ソーダ	痕跡
食鹽	〇〇八グラム
鹽化カリ	痕跡
硅酸カリ	同
硫酸ソーダ	同
硅酸ソーダ	〇一八グラム
硫酸カリ	同
ヨード	同
合計	三〇、一三四グラム

右分析の結果によりて、この泉水は普通の石灰質多い地に湧く水と等しきものにて、人の體に影響する程の含有物を認めざれば、これを飲むとも少しも害なし。

千八百五十八年八月七日

ファイルオル

教授は尙これに附記して、

「この水に治療の判然な効能を興へる物質を含みをらぬ故、この水を用ひて平癒つたとの異常な事實は、少くとも今日の學術にて、分析上、この水に含んである鹽分の性質により、之を證明することができない。」と申しました。

この報告が町役場に届いたことが傳はると、待つてゐた人達は先を争うて町役場に行きました。そして歸りには大喜びで、日頃の信仰が誤りでなかつたこ

とを得意にしてゐる人もあれば、しをれてこれまでの主張が外れたのを残念に思ふ人達もありました。けれども中にもまだしきりに冷笑して、まけをしみを云ふ者もありました。然し事は確かに決定しました。いはゆる實驗科學の正確は「それが明かに説明することの出来ない超自然的作用があること」を示したのでした。



揭示の撤去

ファイルオル教授の泉水分析によつて、知事が壓制の口實にしてをつた分析は、いかげんなものであることがわかりました。従つて知事の處置が無理であることが證明されたが、高慢な知事は、それでも壓制の手をゆるめず禁止の揭示も撤去りませんでした。

それで一般の人民は云ふまでもなく、今まで黙つてゐた宗教研究者までも知事を批難し始めました。そしてオーシェ市の大司教ド、サリニス師と或る一人の富豪とに、禁止を解除について力を借して欲しいと願ひました。それで二人は、今人民が強く行政官に抗つては、却て不利な結果になるかも知れないと考へたので、皇帝へ直ぐに願ふことにしました。

時の皇帝はナポレオン三世であつたが、この時西南海岸のピアリツツといふ

地に御滞在であられたので、二人は拜謁して事の顛末を申上げて、禁止解除の勅令を下されるやうに哀訴しました。

この頃丁度四方からぞくぞくと嘆願書が皇帝の御手許に届いてゐました。その一つには、「陛下、この奇蹟は實證多く、悉く人の實際に見たる所なり。故に本縣の人民は一般に之を超自然的現象なりと信ず。然れども、臣等は聖母出現の眞か否かを決定しようとするものではなく、突然湧出た泉水は、分析により學術上全く無害ものと認められ、またこの水によりて不治病は癒され、健康が恢復される者多くあるにも拘らず、尙人民の之を汲むことを禁止するは、理由なき不法の壓制なりと信ず。

陛下。もし人民の信仰自由を妨ぐるこの壓制を不可となし給はば、人民の彼處に行きて祈ることを許させ給へ、また學術上の研究に光明を求めんとする人々は、彼所に至りて自由に眞理を探究め、もしくは誤りを發見することを得し

め給へ。」

とありました。

皇帝はかねて教務大臣から奉受を受け、また新聞の記事などを御覽なされ、少しは承知してゐられたが精しい事實は知られる筈がありませんでした。今度初めて委細二人の口からお聞きになられ、教務大臣や知事共が、ほしいままに職權をふるつて壓制を加へ、政治の信用を傷けてゐることを聞いて、御不快の御様子であられたが、たちまら電報用紙を取られペンを走らせました。

皇帝より禁示解除命令の電報を受けた知事は、全く驚いてしまひました。そして淡い望をもつて急いで皇帝に上書して自分の意見を奉上げ、また教務大臣にも書を送り、陛下の裁決を變られるやうに執成かたを願ひました。然し皇帝はその願ひを容れられぬばかりか、第二の勅命が更に降りました。知事はもう猶豫するひまがないやうになりました。

かうなれば知事は早速御勅命に従つて、自分の命令した禁止を取消すべきであるのに、信仰派に對して、自分の敗北を公にすることを厭がつたので、なるべくうやむやの間に態よく取消をしようと思つて、ひそかに苦心してゐました。この時彼の爲にも幸ひにも、勅令のことがいつのまにか評判になつたので、彼は必ず人民が掲示札を河に投げて、柵を破つて參詣するに違ひないから、ただ警部や巡査の監視だけ止めさへすれば、それで事は済むと思つてゐました。けれども人民は、知事の見込と違つて、まだ公の取消が出ないから、みだりに掲示札を捨てたり、柵を越えるのはよくないと思つたので、監視人がゐなくても、そのままになつてゐました。所が、そこへ大藏大臣がタルブ市に用事があつて來た序に、ルルドに立寄つた時、彼は皇帝の意を知事に傳へて知事を恐れさせました。それで十月四日、知事は皇帝の名を以て町長に禁止を取消させ、又警部チャコメには掲示と柵とを取除かせました。

聖堂の建立

司教ローランスは前に述べたやうに、充分調査してから、出現の姫君は聖母であることが知れたので、すぐに御意に従つて、そこに聖堂を建てようと決心した。所が洞穴とその附近はルルド町の所有地であつたので、早速買求め、その上將來の擴張のためと思つて、洞穴の前面とその側の牧場をも買入れました。そしてこの土地に聖堂を建てることを教務大臣から許されてから、イボリト、ヂュランといふ技師に頼んで設計させました。

さうして千八百六十二年十月初に工事を起しました。然し建築の場所は、聖母が出現れ給うた岩の上にあたるので、多くの人夫が集つて働いてゐても、洞穴の邊には降りて来るものもないから、信者が来て祈をしたり、泉の水を使つたりするには妨げになりませんでした。

信者達は、最初から聖母の御像や、繪姿などを持つて来て、洞穴の内に飾り立てたけれども、まだこゝに現れ給うた御姿のものはありませんでした。千八百六十三年七月頃、フランスのリオン市に住んでゐる、ラクルといふ二人の姉妹は、ベルナデッタに現れ給うた當時の御姿をそのままかたどつて造らうと思つて、美術學校教授ジョゼフ・ソアビシと云ふ人に頼みました。それでソアビシは下繪をつくる爲にルルドに来て、ベルナデッタから親しく種々な説明をきゝとりました。そして書いた下繪を何回も見つて、やうやく出来上ると、イタリアのカラル市地方から出る最も上等な大理石を取寄せて見事に彫刻しました。玄人は皆ほめた程でしたがベルナデッタは、

「これはまことにきれいですが、洞穴に現れ給うた姫君には、とても比べものになりません。」
と云ひました。

四月四日（千八百六十四年）ローランス司教は自ら先達となつて行列し、この像を祝して洞穴の入口に置きました。この行列に加つた人は二万以上でありました。けれども、その時ベルナデッタと司教ベイラマル師とは、病氣でこれにあづかることが出来ませんでした。これは高慢の心を起させない爲の、深い御はからひによることではないでせうか。

今では、聖堂は現れ給うた岩の上と、その前とに、都合三つあつて、これをルルド聖母の聖堂、地下の聖堂、ロザリオの聖堂と呼んでゐます。いづれも立派に建てられたものです。

このうち地下の聖堂は千八百六十六年五月九日にローランス司教によつて祝されて開かれたのですが、その開堂式の日を集つた者は司教ばかりでも三百名であつて、普通の信者はどれだけであつたか、殆ど数へることが出来ない程でありました。

その頃までルルドには主任司教ベイラマル師の外に、三人の司教がをつて、参詣者の告白をきき、又聖體を授けてゐたが、次第に参詣者がふえてきて、ルルドの司教ばかりでは間に合はなくなつたので司教は特に参詣者の爲に、何人かの司祭を洞穴の方にをらせるやうにして、毎日こゝでミサ聖祭も行はれるやうになりました。

千八百七十一年、二階の聖母の聖堂はほど出来上つたので、その年の八月十四日に祝別の式をあげました。これを祝した司教は、その建築に力をつくしたローランス司教ではありませんでした。ローランス司教はこの時から六ヶ月前に病氣で死なれたからでした。

越えて千八百七十六年七月二日には工事が完成つたので、献堂式があげられました。この時大司教、司教が三十五人、司祭三千人、信者は十萬以上集りました。参詣者は年々増えるばかりで、この廣い聖堂も狭くなつたので、更に岩

の前にロザリオの聖堂を新しく建ててることになりました。この聖堂は千八百八十三年七月に工事に始まり、千八百八十九年に出来上り、祝別式があげられたのです。この聖堂の建築費は内部の装飾を除いて三百萬フランでした。

以上の三個の聖堂を建てた費用は、世界各国の信者から寄附されたが、大部分はフランスの信者から献げられたもので、彼等は、聖母が殊に自分等の國を選んで現れ給うたのを感謝するために、他國の人々よりも奮發して多くの寄附をしたのであります。

昔は非常に淋しかったマツサビエルの洞穴も、聖堂が建つと共に、種々な建物がこのあたりに建てられたので、頗るにぎやかな美しい市街になりました。けれども相變らずもとのながめを保つてゐるのは、かつて聖母が現れ給うた洞穴一つだけであります。細長い入口には昔のまゝにつる草や芝草が生へ茂り、かつて聖母が踏みなされたのはらは、フアビシの彫刻た御像に踏まれてゐます。

そして大きな方の洞穴の奥には祭壇があつて、その内部は蠟燭の絶え間ない油煙のために黒ずんでゐます。洞穴の前には鐵柵があります。これは、みだりにそこへはひらうとする者や、或は厚い信仰にまかせて、記念の爲に草や木の枝をとつたり、岩などを削つたりして、外觀を悪くする者を防いで近づけない爲であります。

洞穴に向つて右には白大理石の高座があつて、司教がこゝで、説教やロザリオの祈を行ふのであります。泉は洞穴に向つて左にあるが、その側には、聖母がベルナデッタに仰せられた語と、年月日が彫刻けられた碑石があります。

「泉に行つて水を飲みそして顔を洗へ」

一千八百五十八年二月二十日

この泉の水を飲まうとする時、混雜をさける爲に、廣い建物が三棟あつて、太い一本の管でそこまで泉の水を引いて、更に多くの細い管で、それを何ヶ所

にも分けてあるから、汲んで飲むには頗る便利になりました。これは飲むためと顔を洗ふ爲であるが入浴に用ひるものは別にその左側にあります。この泉は今日に至るまでつゞいて湧きでて、一分間に八十五リットル位出ると云ひます。又洞穴の内外には、撞木杖と祈がき、届けられた記念の品が山と積まれてあります。これによつて、いかに多くの病人が全快り、又心のくされた者がいかに多く改心して、再び正しい道に立戻つたかを知ることが出来ます。かうしてマツサビエルの洞穴は、比べることも出来ない程の靈場となつたのであります。



参詣及び行列

聖母が望み給うた聖堂はすでに出来上つたが、その外の御望である、この地に多くの人が來ることと、行列のことはどうなつたか、之に就て少し述べるところにします。

ルルドに行はれる奇蹟によつて、洞穴に現れた姫君が聖母であると信じて、最初から一人一人に参詣した者は、非常に多くて、ただそれだけであるか判らないが、教會では、司教の判定が、公にされない間は、人民の参詣については關係しませんでした。無論行列もなかつたが、千八百六十二年、司教の宣言が發表されてからは、教會でも信者に参詣をすすめたが、尙行列をする機會はまだなかつたのでした。しかし二年すぎで、千八百六十四年四月になつて、フアビシ教授が彫刻した聖母の御像を洞穴に安置するとき始めて行列をすることが出来たの

です。

それから後は、諸々方々から集つてくる参詣者が、ますます多くなるに従つて、ルルド附近の小教區では、團體をなして参詣するやうになり、この團體はいつもにぎやかに行列を成つて行くのを例とするやうになりました。これは最初、ルルド附近の小教區に限られておりましたが、次第に他の教區にも擴つて、フランス全國に亘り、遂には世界各國にまで及んだから、ルルドでは殆ど行列を見ない日はないやうになりました。

さてルルドには約幾人の参詣者があるかといふことに就て鐵道局では毎年調査してゐるけれども、歩いて來た者や自動車で來た人達もあるので、確かな數は判明りません、けれどもルルド檢證所長ボアサリ醫學博士から送られた手紙によりますと、

千九百〇八年 二百萬人

千九百〇九年 百十萬人

千九百十年 百十五萬人

千九百十一年 百二十萬人

このやうに参詣者は年々加つてゐます。但し千九百〇八年に特別多數であつたのは、丁度聖母出現の五十年に當つたからなのです。

かうした大勢の参詣者は、ルルドに着くと必ず行列をなすことが例となつて、行列の大小は、團體に屬してゐる人數の多小によつて同じではないが、時には一團の行列の人數が十萬人位になることもあります。

千八百九十九年には、フランスの男子ばかりでつくつた、三萬五千人の團體が参詣し、千九百一年には同じく四萬五千人の團體、その翌年には同じく六萬人の團體が参詣しました。凡ての團體参詣は日本の何々講などといふものとは違つて、多くは相當の教育あり學識のある人々（特別醫學博士が來ることが多

い)によつて成つてゐます。勿論正確に云ふことは出来ないけれど、少くともその半分は、中學以上の教育を受けた人々であります。そして近年参詣者の中には帝王もあつて、英國の故エドワード陛下や、ポルトガル國の皇太后アメリ陛下などがあります。この外聖職にある司教、大司教、カルチナルのやうな、高い位の人々の参詣も少くないのです。

普通司祭の参詣は幾萬人あるか判らないのですが、千九百九年と十年との二一年間に、行はれたミサ聖祭の数は、五万五千三百回であると云へば、これを行つた司祭の数が夥しいことがぼゞ知れるわけであります。そしてこれらの人は云ふまでもなく、世界の國々からはるゞ來たものであります。

この多人数の参詣者が、ルルドで行ふ行列の盛にして莊嚴なさまは、或る新聞紙の記者が、かの十字軍の時から、宗教上の事に關してこれ程多くの人々が活動したことはなかつた、と云つたことによつても察することができます。

かうして、聖母の第二の御望である行列も充分に行はれたのでした。聖母がかくも崇敬られるのは、救主クリストの御母に在すからであります。そしてこれに扶助を願ひ、とりなしを求めるとは、昔から行はれ、そしてこれを尊び敬ふことは今に至つても變らないのであります。所が新教と云はれてゐるプロテスタント教の人々は、聖母を崇敬することを誤りと認めて、天主教は偶像教である、聖母に對して拜禮を捧げるなど、云つて、嘲つたりするけれども、天主の信者がいかに愚であるかと云つても、聖母を天主と等しく拜禮することはありません。ただ救主の母であるから尊敬するばかりです。それは當然のことではないでせうか。聖母を崇めて扶助を願ひ、とりなしを求めることが、もし天主の御心に適はないならば、ルルドに於て、聖母によつて奇蹟を現したり色々な不治の病氣を癒し給ふことはない筈です。御心に適へばこそ聖母はルルドに幾度も現れて人々が信賴して祈るのを奇蹟を以て勵められたのでありませう。

出現後に於けるスピルスの家族

さて、ベルナデツタの一家は、その後いくらかでも餘裕な生活が出来たでせうか。やはりあの古い監獄跡の一室で、貧しい生活をつづけておりました。

かつては毎日出稼して得た僅かな賃金によつて、その日を細々と暮してゐたのでしたが、ベルナデツタが洞穴で姫君の出現に逢つたといふうはさが、世間に擴つてからは、訪問者の應接にひまがなくて、思ふやうに外出も出来なければ、毎日の仕事も度々休むので、生活の困難は一層ひどくなつてきて、両親は三度の食事に、自分等は何も食べないで、たゞ子供達にだけ與へることが度々ありました、つひには子供達にさへ與へることも叶はなくなりました。

これは親としてどれ程の心の痛でしたらうか。然しこれよりも心の悩みとなつたのは、訪問者の贈物でした。これらの人達は、この質朴な一家の慘狀

に同情して、些かながらその志を取らせようとしたが、スピルス夫婦を始め、ベルナデツタはたゞその好意に謝するだけで、すべて皆堅く斷りました。それはたとへ饑ゑて死ぬとも、理由なく人の物を受けることを喜ばないばかりか、之がために聖母の榮譽を損ふことを恐れたからであります。

かうして日々に迫る彼等の困窮を見たルルド町の人々は、自分のことのやうに心を痛めました。清い心の前にはどうすることも出来ず、物質の援助を斷念つて、この上は天主が彼等を助け給ふやうに祈つておりました。殊にルルド教會の司祭ペイラマル師は、自分の善の慘狀を何より心配して、この一家のために、相當の職を得させたいものと考へておられました。

人々は當時、ベルナデツタは姫君から三の祕密を告げられたと云ふことであるが、その一つは或はかうした艱難を甘じてしのぐことではなからうか、もしさうであるならば、實によく行はれたものであると云つておりました。

又多くの新聞紙は、この一家の者について、初めは詐欺の手段をする者であるなどと、罵つてゐたが、この有様をみて遂にこんなことを書くのをやめるやうになりました。

スピルス一家は其後も、かうした状態で九年の久しい間苦しみました。天主は尙も彼等の信仰を試み給ふ爲か、ペルナデツタの母は重い病氣に罹つて、十二月八日洞穴で聖堂奉獻式が擧られた聖母無原罪の祝日に、遂に死去つたので、一家の悲しみはとてもひどいものでした。夫スピルスは、數日の間何事も手につかず、たゞかなしみに沈んでゐたが、やうやく心を取直して子供達を家に残し自分は外に出て食へることのために動きました。

かうまでにスピルスが、屈せず働く精神を、天主はあはれとみられたものか、或日ペイラマル師が、町端のガブ川の邊を散歩してゐると、ラカデ水車場が賣物になつて貼札されてあるのを見つけました。

司祭は前から、スピルスに相當の職を與へて、貧乏の苦みを救ひたいと考へてゐた時ですから、この賣物を與へるのは最上の救ひの方法と思つたので、洞穴の聖堂を受持つてゐる司祭にもこれを相談して、その賛成を得てから、すぐに事情を認めて司教の許可を願ひました。司教も亦スピルスが貧乏の身でありながらよく公教信者の徳を守つて、無欲生活を送つてゐることを聞いてゐられたので、早速許可を與へ、千八百六十七年八月二十九日に司祭ペイラマル師は、あらためてこの水車場をスピルスに與へたので、彼はこの時から生活に苦しむこともなく、子供と共に楽しくその日を送ることになりました。

けれども長の艱苦をしのいで來て、わづかに安心したのも、ほんの四年、千八百七十一年三月四日、スピルスは五十五才で死氣で死亡しました。彼は質朴く心正しく、親切でへりくだり深く、その上信仰が厚く、殆ど一生の間不幸に過したにもかゝはらず、朝夕の祈を怠つたことがなく、死に臨んだ時も、まる

で聖者のやうに、少しも苦しむ様子もなく、いと平安な顔で、いつも身から離さなかつたスカブラリオを見詰めながら「みむねのまゝにならせ給へ」と誦へて静かに眼を閉ぢました。

尙聞くとところによりますと、彼は自分の娘に對して、聖母が垂れ給うた恩恵を深く感謝し、また、ベルナデツタが童貞會に入つてからは、その寫眞に對する彼の態度が、あたかも聖者に對するやうに恭しかつたといふことです。

ベルナデツタの弟や妹も、後に相當の道を得て、各々身を立てました。



ベルナデツタの傳

ルルドの聖母出現に就て最も大きな關係あるベルナデツタのことは、今まで度々述べてきましたが、まだたらぬ所があるのでこゝにその大略を記すことにします。

さて、聖母の出現は、その年の七月十六日限りで、その後はありませんでした。けれども彼女が聖母に對する信仰はいよゝ／＼深くなつてきて、お恵を受ける者の甚だ多いことは前にも述べた通りであります。それでベルナデツタの評判は益々高くなつて、その光榮を羨まない者はない程ですけれど、彼女は少しも高慢る心を起さず、バルトレス村で羊の群を守つてゐた時と同じやうに、へりくだり深く、無邪氣に母を助けて家事の手傳をしながら學校にも通つてゐました。

翌年（千八百五十八年）ベルナデッタは、もう十五才になつたが、まだ初聖體を受けてゐないから、その準備のために、聖堂に行つて教理を學んでゐましたが、遊びざかりのことであれば、他の子供達と少しも變りがなく、たゞ天主を愛する心ばかりは他にすぐれて、自然それが行動に現れてゐました。

この年の六月三日に、彼女は初聖體を受けたが、ルルドの人達は、この喜ばしい秘蹟を受ける時には、彼女はきつと洞穴でしたやうに氣を奪はれてうつとりなるであらうと思つてゐたが、たゞ深い喜びの色を現しながら感謝するだけでありました。それは、洞穴のことは天主の特別の恩寵で、聖體の拜領は、信者一般に賜はる秘蹟であるから、これは考へ違ひしてはならぬことでもあります。けれども、それからおよそ一月後の主日に司祭が人々に聖體を授ける時、ふしぎな光がベルナデッタの頭の上に輝くのを見たとき、ペイラマル師は語つたといふことであります。

洞穴の事件があつてから、ベルナデッタは絶え間なくある訪問者のあしらの爲に、ひどく健康を悪くして床に就いたが、彼女は、敬愛する聖母の榮譽の爲であるからと云つて、病氣をしのんで應對して、快く質問に答へてゐました。時としては、野人の失禮な質問や、無宗教者等の反抗的質問には心苦しう思つたこともあつたが、いつもおだやかな微笑のうち聞き流してゐるのでした。たゞ一番心苦しう思つたのは、彼女の家の慘狀を見て、金や品物を恵まうとされることであります。それは、かうしたことゝの爲に、聖母の榮譽をけがしたり、御徳を害ふことになるまいかと恐れたからでありました。

いつか、ソワソンの司教コウトレ師が温泉からの歸りにルルドに立寄つて、ベルナデッタから親しく洞穴の出來事を聞いたことがありました。その時司教は感嘆のあまり、自分が常に持つてゐる高價いロザリオを取出して、ベルナデッタがいつも使つてゐるロザリオと、記念のために交換たいと云ふと、彼女は

自分のものは謹んで司教に贈りましたが、司教の貴い品を受けるのは自分の志でないと言つて、固く断つてどうしても承知しませんでした。ベルナデッタを始め、彼の一家が皆そろつてこの通りであるから、生活はますます苦しくなつて、彼女が健康を悪くしても薬は云ふまでもなく、食物さへも得難いことが度々でありました。

ベルナデッタが通つてゐた小學校は、ヌベエル市慈善童貞會で立てたものであるから、童貞女等は彼女をあはれんで、薬や食物を與へ、心も身をも保養させようと相談して、彼女を病院に引き取りました。そして聖母が特に愛し給うた者であるからと云ふので、一層手厚く世話したが、どうしたことが豫期に反して、彼女の身體は却つて弱つてゆくばかりでした。

ある日、ベルナデッタの容態が増々悪くなつてきて、醫師たちも望なしと申渡したので、終油の秘蹟まで授けたが、ある童貞女の思ひつきで、洞穴の水を

一匙與へました。所がたちまち彼女は起き直つてしづかに話を始めたから、童貞女等は、これは全く奇蹟であると云つたが、正當い調査をしたのでないから、あまり世には知れませんでした。このやうなことが度々あつても、彼女の病は根本から癒りませんでした。その上訪問者は病院にまでおしかけて來るので、彼女は保養どころではなく、健康が増々悪くなるばかりでした。それでも彼女は病氣の苦を忍びながら一々應對してゐました。

かうしてベルナデッタは十九才になつたが、この年ヌベエル市の司教がこの地に來られたので、ベルナデッタは院長の紹介で司教に逢ひました。司教は聖母の出現に就ていろいろ聞いてから、靜かにベルナデッタの前に跪いて祝福を求められました。院長は驚いて、「閣下こそ、この少女に祝福を與へなさる筈でありますのに……」

と、申しますと、ベルナデッタはすぐに跪いて司教に祝福を願ひました。

司教は祝福を與へてから、彼女の將來を案じて、「童貞會に入る心はないか」と訊きました。が無邪氣な彼女の心には、これまで何も考へてゐなかつたから、急に決心がつく筈もなかつたので、よく考へてからお答へ申しますと云つて、司教に猶豫を願ひました。

それから二年後、即ち千八百六十六年に、彼女はいよいよ童貞女にならうと決心して、七月四日に最も愛する親弟妹に別を告げ、また數年教へを受けた司祭や教師にも別を告げて、なつかしい故郷を後にして、一人の童貞女につられてヌベエル市に向つて出發しました。この時彼女が殊に悲しく思つたのは、かの洞穴に遠く別れて、この地を去るといふことでした。それでこの日は朝早く洞穴に參詣して別を述べて、うち伏して涙を流し、悲しんでゐましたが、しばらくしてから彼女はやうやく立ち上つて、幾度もふり返りながら、そこを立ち去りました。

ヌベエル市の童貞院では、ベルナデッタが入會するといふことを聞いて、まるで天の使でも待つやうにしてゐたが、獨り院長ばかりは、このことに就て心配してゐました。それは、聖母が特に愛し給へる子を自分のあつかひによつて、もし謙遜を缺く者にでもさせたならばどうしようかと、深く恐れを感じたからでありました。それで院長は會員一同を集めて、そのことに就てよく説き誡めました。

かうしてゐる中に、ベルナデッタが着きましたので、院長は入會の式を行ふとき規則に従つて厳しく彼女を調べて、賄室で炊事といふ最も賤しい仕事を命じました。これは云ふまでもなく、謙遜を失させないやうにする爲でしたが、院長はこれを命ずるには餘程の苦心をしたのでした、けれどもベルナデッタは、少しも氣にかけずまた苦しいとも感じませんでした。

ベルナデッタは童貞院の會員になつてから、マリイ・ベルベルと呼ばれまし

た。

入會の初數ヶ月の間は、ベルナデッタの健康は頗るよくありましたが、やがて再び病氣にかゝり苦しむ身となりました。そして一ヶ年後のある夜、俄かに多くの血を吐いたので、童貞女等も醫師も大に驚いて色々手当をしたが、その効もなく次第に危く見えてきたので、院長はそのことを急いで司教に知らせました。司教は夜中であつても直ぐ駆けつけられたが、なほ血が止まないのので、聖體を授けることが出来ませんでした。それでたゞ終油の秘蹟だけを授けて、臨終の時の色々の式を濟ませ、涙ながら立ち去らうとされた時、院長はまだベルナデッタが修道女の冠を頂かないで終ることをひどく惜んで、司教にそれを求めたので、司教はそれならばと云つて、彼女の耳に口を寄せて、特にその冠を與へる旨を告げられると、ベルナデッタは悦ばしげに天を仰いで、希望と感謝の意を表したので、司教は嚴かにその式を執行つて、これがこの世の別

れであらうと悲しげに歸られました。

所がベルナデッタはまだ臨終ではありませんでした。血を吐くことが止まるとぐつすり眠つて、數時間の後に眼を開いたが、多くの女達と院長とが枕邊にゐるのを見て、かすかに笑を浮べたので、一同の者はやつと安心しました。かうして日に日に快くなつて、病氣も大方癒つたのに、不幸はなか／＼去りませんでした。それはちよつとも忘れたことのないなつかしい母が、この世を去つたといふ報知を受けたのでありました。ベルナデッタはこの悲しい知らせを受けて嘆のあまり氣を失つて倒れましたが、やがて正氣に復つて「私がルルドを立つ時には、大層丈夫でいろ／＼の世話もして下さるし、別れる時には、又逢ふこともあらうと勵まして下さつたのに、その言葉も空しくなつて、もうこの世ではお目にかゝることが出来ない永のお別れとなつたのか」と云つて涙ながら嘆きました。

かうしてまた病の癒らないうちにはげしい悲を受けてから、又弱つて、童貞院の規則を守りかねるやうになつたので止を得ず特別の生活をしてゐました。

そのうちに彼女は再びよくなつてきたので千八百六十七年十月三十日に他の志願者と共に、改めて修道女の誓願を立てました。この童貞會の規則として、誓願をした童貞女等は、すぐにその會に附屬する各地の病院或は學校に遣はされて、そこに勤めるのであります。そして本部にとゞまるのは経験の多い老齡者に限るのであるから、ベルナデッタのやうな若い者は本部に留る筈はありません。所が特別にこの病院に勤めることになつたので、司教は彼女が万一にも慢心を起してならないといふので、下女のやうな下働の勤を彼女に命じて、それを防がせられました。

ベルナデッタは、かうした事には少しも頓著なく忠實に働きました。そして

病院に勤めることは、かねてからの望であつたから、非常に喜んで、病人に對しても自分の病苦にくらべて同情の心が厚いから都合のよいことが多いのでした。然しながら、病院の勤に従ふには、慈愛、忠實と健康であることの三つが必要なのに、ベルナデッタは他の二つは人に勝れて備つてゐるけれども、健康は極めて劣つてゐるので、その務を全うすることはおぼつかないと思はれたが、果して彼女の健康は永く續かず又病氣になりました。それで醫師は院長に向つて「ベルナデッタは人を看護すべき者でなくて、人から看護されるべき者である」と注意したので、その後彼女は院内の聖堂の係を勤めさせられ、主に祭壇のかざり、祭服のつくり、飾物を製作することなどをしてゐました。彼女はこれ等のことを非常に手際よくして、その趣向も高尚で、これまで人に知られない技術を現したが、中にも彼女が作った刺繡は殊に巧みで、その見事な物が今も残つてゐるさうです。

彼女の病氣は初め喘息だけであつたが、年と共にリウマチス、骨痛、吐血又は腫物などの病氣が殖えてきて、孱弱い身を一層苦しめて、時としては心の苦痛さへも加はりました。

ある日のこと、彼女は床に臥してゐると、黒い棒がついた一つの封書が配達されました。彼女は胸をさはがせながら震へる手でやつと十字架の印をして、「何事も天主の聖意に御任せいたします。」

と云つて封を開いて見ると、それは父の死んだ知らせでしたので、今更ながらびつくりして絶えいるばかり泣き悲しみました。

このやうに體は病に苦しめられ、心は歎きに満たされても、靈魂の汚には一度も思ひ至らなかつたから、その苦痛をこの頃まで知らずに過してきたが、今は自然と氣のつくことがあつて、自分の救靈につき苦しむことが病の苦みにまして一層烈しくなりました。それは自分の缺點を省て、聖母がかつて仰せら

れたやうに、果して來世に幸福な者となることが出来るであらうかと云ふ氣がかりでした。この苦しい氣がかりは彼女の缺點を除いてやらうといふ、天主の慈悲深い攝理であつたかも知れません。ペルナデツタの缺點といふのは、その剛情なこと、彼女自らも、

「私は生れつき剛情なために、度々惡に汚れることがあります。あの洞穴の邊に泉が湧いた時も、聖母がその水を飲めと仰せられたのを、二度までも打すて、三度目にやうやう飲み下しました。その爲ですか、姫君の御名を伺ひ申した時、三度目にやつと御答を得たのです。」

と微笑みながら話したことがありました。然しこの靈的苦痛を感じるやうになつてからは、その他のくせも次第に見えないやうになりました。

ペルナデツタがかうした生活をしてゐる間、ルルドでは聖堂が建つて行列も行はれ、泉の水はますます靈驗を現して、人民の信仰はいよ／＼盛になり一般

の宗教心も大いにその趣を改めました。けれども反對派の人達はなほ攻撃をやめないで、罵つたり嘲つたりしてゐました。その爲かうして世を離れてゐるベルナデツタにも迷惑がかけられることもありましたが。

千八百七十二年八月二十八日の「リユニオン・メデカル」といふ醫事新聞は、パリにあるサルベトリエルといふ精神病院の長ボアザン博士の講義を掲げました。博士は精神病について色々の事を詳しく述べて、終りに幻想にかゝる發狂の有様を説きました。そしてベルナデツタを例に引いて、彼女は今ヌベル市のウルスリス童貞院に閉籠められてゐると書いてありました。

ヌベル市の司教はこれを読んで、直にその誤りを正させました。又アルチュスとい人は「もしボアザン博士がよくその講義が事實であることを説明する事が出来たならば、一万フランの金を與へよう」と申しましたけれど、博士は遂に一言も答へないでしまつたのでした。

ベルナデツタは世の議論が自分の身に及んでゐることなどは少しも知らないで、かの洞穴のことを思出して、「つばさがあるならば飛んで行けるのに」と友達に語つたり、又親族を忘れないで、手紙を出して慰めたり信仰を勵ましたりしてゐました。

千八百七十八年十二月彼女はひどく病氣が悪くなつて、再び病院に送られたが、タルブ司教は人々を遣はして、更めて洞穴の出來事について、委細の質問をさせたので、彼女は堪へがたい苦みを忍んで答へました。そして天主の御名にかけてその眞實を保證しました。

さうしてゐる中に、彼女の容態が増々悪くなつて、見舞に來た童貞女や司祭の前で、身の苦しさに知らず知らず呻くことさへありました。けれども常には自ら心を勵まし氣を靜めて、しかと十字架をにぎりしめ、御主の傷に接吻して、「主よ、私のこの苦痛がどうして御身の御苦痛に及びませう。これを御苦痛に

合せて献げます。あゝ主よ、私はこの苦痛の中にも、万事に越えて主を愛します。」

と誦へることを止めませんでした。

千八百七十九年三月十九日聖ヨゼフの祝日には、妹アントワネットが見舞に來て、慰めてくれたのも嬉しかったが、更によろこばしい慰めは、この日に自分の死期が近づいたのを覺つたことでした。

この月の二十八日は、病勢がいよいよ重くなつたので、告白して聖體、終油の秘蹟を授かり院長や友達に向つて、これまでの不行届をわび、その親切を厚く禮して、最後の別れを告げました。

悪魔は人の幸福を妬んで、力の及ぶ限り妨をするといふことであります。されば聖母の愛する子であるベルナデッタの最後のときも、悪魔は來て苦しめたものとみえて、ベルナデッタは苦悶の餘り、いつも親しくしてゐた童貞ナタ

リーに向つて、

「私は一般の人にも増して天主と聖母の御恵を受けながら、それをなをざりにしたことが恐しく思はれます。」

と云つたので、ナタリーは慰めて、

「決して失望なさいませぬ。救主はそれを償ふだけの寶を、御苦難によつてすでに積みおき給うたではありませんか。」

と諭すと、ベルナデッタはそれを聞いて喜んで、「それで安心した」と云ひました。

越えて四月十六日には、ベルナデッタの病苦は一層ひどくなつて、今は靜かにねどこに臥すことさへ出來ないで、やせ衰へた體を長椅子に凭れてひたすら死期を待つばかりでした。そして重ねて告白し、尙當時の教皇ピオ第九世から最後の時のために與へられた特別の祝福をも受けようと、熱心にその祈を誦

へてゐたが、午後二時頃になると、一滴の水さへも喉を通らない程なのに、會て聖母が教へ給うたやうにきちんと容を正して恭しく十字架の印をして、微かながらも聲をあげて、あたりにゐる人々と天使祝詞を三度まで誦へてゐたが、その三度目を誦へ終らぬうちに、靈魂は早くも體を離れて聖母の所へ行きました。時に年三十五才。丁度水曜日で善き死を求めた聖ヨゼフの記念日でありました。

ベルナデッタが死ぬと、童貞女等はさすがに名残が惜まれて、しばらく靜かに祈つてゐたが、やがて心を勵まして、清らかな修女の服を取出して遺骸に着替へさせ、白いばらの冠を頭に戴かせ、胸には十字架をかけ、手にはロザリオを握らせました。その様子を見ると病苦にやつれた様子もなく、氣高く美はしく、平生の清かつた心も自然と現れ、見る人に愛慕の念を起させたが、人々はこれを見て聖女が世を去つたと云ひました。かうして遺骸は聖堂に移されて、

そのまま臺に載せて棺に入れる時まで置かれてありました。

ベルナデッタの死んだことは、誰が告げるともなく傳つて、翌朝から棺を出す日まで人々は我も我もと集つて来て、聖堂の入口に押寄せたので、順番を立て、押し行かねばならない程混合つたけれども、これ等の人々はベルナデッタの徳に肖せ、又記念にしようとして、ロザリオや其他の品物を遺骸にふれさせて歸り、友達や知人に分けて與へた人もありました。

司教はこの時折悪く巡回中で不在でしたが、この知らせを受けると、直ぐに出先から歸つて来て、葬式のミサを行ひ、聖祭も終つて、遺骸を更に院内の聖ヨゼフ堂にかづき返させて、そこで柏の柩に納め、傳記や其他の書類を封入れて更に鉛の箱に入れて聖堂の内に葬らせました。

ベルナデッタの死んで後二十九年目即ち千九百八年になつて、スベエル市の童貞院長は、彼女の爲に福者の號をおくられたいと願ひでたので、教會ではこ

れを聞き入れて、直ぐに委員を擧げて調査を命じました。委員は翌年十月から百三十三回の調査を行ひ、その報告をローマの教皇廳の禮部聖省に申告しました。その年の九月二十二日ヌベエル市の司教ゴデー閣下は、委員と二人の醫學博士と童貞女とを立合はせて、ベルナデッタの墓を開き、柩を開けて檢べて見ると、腐れた跡もなく少しの臭味もなく、葬られたまゝの姿で、おだやかに眠るが如く横はつてゐました。又着てゐた修道服も當時のまゝになつてゐ、顔や手や腕などの現れてゐた所は青白く、光輝なく、唇は赤味ををびて、やゝ開いてゐる爲前齒が微かに現れ、兩手は胸の上に合せて、ロザリオを握つてゐたが、手の甲の血管は、まるで生きてゐる人のやうにもり上り、爪も亦生きてゐる人のものと異つてゐる所がありませんでした。

童貞女等は遺骸を棺からとり出して、洗つて着物をとり替へました。その間醫師は傍にゐて精密しく檢べたが、皮膚はどこも全く乾いてゐました。指先で

腕と股の間を押してみると、凹んだ所も指を放せば、直ぐにもとに復る弾力があつて丁度死んでから數時間位しか過ぎてないものゝやうでした。然し調査の爲に永く外の空氣にふれさせて置いたので、其色は少し黒ずんで見えました。

それから内側をトタン板で張つた新しい柏の棺に、白い絹を敷いて納め、前に入れてあつた傳記と葬儀録、更に此度の調査の始末書を添へて硝子瓶に容れ司教の印を捺して封じ、次に鉛の箱に納めて、再び元のやうに埋られました。

其後禮部聖省では調査を重ねて、遂に千九百二十五年六月十日福者の位を贈る盛大な式がローマで行はれて、福者の尊い稱を受けることになりました。

越えて一千九百三十四年十二月八日、聖母無原罪御懐胎の大祝日の日、ローマ聖ペートル大聖堂にて、現教皇ピオ第十一世聖下によつて、彼女は聖人の位に上げられました。その日の参列者は實に五十万人を越えたといふことであります。聖女の祝日はその死去の日を選んで四月十六日と定められました。

NIHIL OBSTAT,
Tokio, le 4 mais 1933
Vincent B. Totsuka censor lib.
IMPRIMATUR
die 7 martii 1933
† I. A. Chambon
archiepiscopus

發行所



昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十五日發行

〔定價金四拾錢〕

著者 マ

東京市杉並區八成町九〇

發行者 丸 藤

東京市杉並區八成町九〇

印刷者 龜 田

東京市杉並區八成町九〇

印刷所 サレ

印刷部

才學

文治

麻里

東京市杉並區八成町九〇

ド・ボスコ社

振替東京六五五五番
電話 萩窪二九一四番

◎次輯豫告◎

カトリック講話集(第五期・第一輯)

聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ

マトン神父著「ルルドの出現」を以て本講話集の第四期を終り、この「聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ」から第五期へ進むこととなります。七月十九日は、聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ、聖會のこの偉大なる使徒の記念日に當りますので、いささか同聖人の事業とその聖徳を頌せんがために本輯を出すことになりました。

發行所

東京市杉並區八成町九〇
振替東京六五五五六番

ドン・ボスコ社

マルジャリア師編
泉に汲みて

菊半截六十四頁
定價一部二十錢
送料

人生果して

生存の價値ありや?

菊半截六十五頁
定價部二十五錢
送料

浦川和三郎師著

聖マリアの連禱

菊半截二十八頁
定價部三十五錢
送料

發行所

東京市杉並區八成町九〇

ドン・ボスコ社

振替東京六五五五六番
電話荻窪二九一四番

終

